

2年Z組銀時先生！～変  
人生徒でクロスオー  
バーだ コンチキショー  
～

雄大

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

超巨大なマンモス校、公立クロス高校。この学園に通う生徒達は全員が変人だった。

その中でも一際目立つ2年乙組のクラス。

それを受け持つ担任、坂田銀時もまたハチャメチャな教師だった。

お馬鹿生徒達とやる気のない教師の繰り広げるクロスオーバーコメディ。

※ 銀時以外の銀魂キャラは基本教師の役などで出ます。

乙組の生徒に銀魂キャラはいません。先生である銀時だけです。

ただ今のクロスオーバー作品

僕は友達が少ない バカとテストと召喚獣 まよチキ 電波女と青春男 中二病でも恋がしたい 境界の彼方 とらドラ 生徒会の一存 やはり俺の青春ラブコメは間違っている sa o 脳コメ はたらく魔王さま! 問題児達が異世界から来るそうですよ 緋弾のアリア これはゾンビですか? 這いよれニヤル子さん! 涼宮ハルヒの憂鬱 変態王子と笑わない猫 ブラックブレッド とある魔術の禁書目録

以上 今後が増える可能性あり。

# 目次

第1話 始まりとはいつも突然だ

1

第2話 テスト前になると大掃除とか  
しちやう

10

第3話 カンニングの準備する暇あつ  
たら勉強しろ!

21

第4話 テストは学生にとっての大魔  
王

34

第5話 人は誰しも本当の自分を隠し  
ている

54

第6話 ゴキブリを見たら三十匹どこ  
ろか三百匹はいると思え

69

第7話 自分だけ弁当忘れた時のダ  
メージはでかい

88

第8話 マンションにはいろんな連中  
がいる

97

第9話 グラサンかけてもたいしてモチ  
ない

108

第10話 桜の木の下の掘っても別に死  
体とかでない

120

## 第1話 始まりとはいつも突然だ

へ公立クロス高校へクロスって何やねん。そう思う人もいるだろうが、気にしないでほしい。そう思っただけでいい。

高等部、中等部とあり、流石に少等部なんてのはないが、それでもこの学校はとんでもないマンモス高だ。毎年多数の入学希望者が出る一つの理由としてはその話題性だろう。

元々空港滑走路として使うはずだった人工島を買い取りその島、人工島メガフロート丸々クロス高校の生徒育成機関として設立したのだ。

さらに驚くことに、この学校は大きく二つの基本学科にわけられ建物が多く建てられている。

基本的な普通科。

武装探偵を育成する武偵科。

この二つの学科をまとめたのがクロス高校だ。

数多くの生徒、教師が存在するこの学園のクラスの中の一つ2年乙組へ向かい一人歩く見るからにヤル気のない白衣の男がいた。

く教室にて、

朝8時もうすぐHRが始まる時間、三列目の一番前に座る頭が半分黒色、半分金色という濁った髪色の少年、羽瀬川小鷹は一人頭を抱えていた。

理由は単純、クラスメイトが超変人だからだ。

「はあ……朝から酷すぎるだろう」

ため息をつきながら呟く小鷹の周りにはもはや日常の風景となつているアホみたいなの光景が広がっていた。

小鷹の隣に座っている三日月夜空は、彼女の一つ後ろの席に座っている雪平ふらのと言い争いを繰り返していった。

夜空は黒色の長い髪を揺らす日本人形の様な美しくしき、ふらのは雪の様な白髪に傷一つない純白の肌をした、妖精の様な美しくしき。見るからに美少女なのだが如何せん、かなり口が悪く男達に近づくと余地は微塵もない。

実際今も彼女のたちの口論を止めてくれる者はいない。

「雪平お前という奴は、いい加減にその下品な口調を、やめたらどうなんだ！　後ろでパイ乙パイ乙聞かされる方の身にもなつてほしいのだから」

夜空は眉間にシワを寄せながら言うが雪平は構わず無表情でいる。

「あら、何を言ってるのかしら三日月さん。私がいったいいつそんな事を言ったという

の？ 証拠はあるの？ だいたいパイ乙だなんて下品な言葉をあまり連呼するものではないわよ」

「何を言う！ パイ乙と言ったのはお前だろ！ それに証拠ならあるぞ！」

夜空はブレザーのポケットから四角い物体を出した。

「ボイスレコーダーだ！ これはお前の声がかしつかりと録音されている！ 聞いてみるがいい！」

『甘草君。パイ乙というのはねえ〜以下自主規制〜』

「どうだ驚いたか！ 雪平！」

夜空は得意気に言うがふらののは表情を全く崩さない。

「三日月さん。盗聴だなんて何を考えているの？ もはや犯罪よ」

「ふん。話をそらそうと無駄だぞ雪平。お前の負けだ！」

「負け？ 最初から勝負なんてしてつもりは無いのだけれど。というか話をそらしているのは、あなたではなくて？」

その後も負けじと三日月は反撃するがふらのも同じく反撃を入れるという無限ループ地獄が続いていく。

本来ならばいつも言い合いを止めてくれる人物、このクラス一の美少年、甘草奏がいるのだが、彼は今奇妙な行動をとっていた。

「がはははは！　これが益荒男の心意気じゃあー！」

彼は何故か上半身裸になり窓に向かって叫んでいた。

小鷹は最初変人だらけのこの学園では数少ない常識人だと思っていた、が何故かいきなり今のような奇行に走るといふ行為によって変人認定された。

そんな奏の後ろの席に座る鍵は、隣の席の寝ている青髪の美少女（布団によって簀巻き状態にある）藤和エリオに向かって手をワキワキとさせていた。

「ぐふふ。寝ている今がチャーンズ！　エリオちゃん『くおらあー！』げふー！」

危うく警察ザタになりそうだったどころを桜野くりむが小学生と勘違いしてしまいそうな程に小さな体で宙を華麗に飛び必殺の蹴りを鍵にくらわした。

更に小鷹の一つ右後ろの席に座るツンツン頭のガタイのいい男子生徒、坂本雄二とその隣の席に座っている悪友、吉井明久は二人で話をしていた。

「おい明久。朝からいったい誰とメールしてんだ？」

「ん？　ああ雄二。今僕は霧島さんにデートのお誘いをしているんだ」

「そうか、ならいいんだ。お前が俺のケータイでメールしなければなああああ!!!」

雄二の言う通り明久の手には雄二のケータイが握られていた。

ちなみに霧島とはBクラスの生徒であり、この雄二という少年に恋心を抱いているのだ。しかし直ぐ部屋に侵入したりとあまりにも行き過ぎた愛情表現に雄二は恐怖心を



覚えていた。

「うるせー！ この間僕が餓死しそうになった時に助けてくれなかったお返しだ！」

「何言ってるんだ！ それはお前の自行車得だろうが！」

そのまま二人は取っ組み合いのケンカへと発展した。

はあ、何やってんだが。小鷹はあきれていた。

寝よう。そう思った小鷹だったが、視界の隅に入った右隣の席の女子、アホ毛をピョコピョコと揺らしながら眼帯少女、小鳥遊六花が黙々とノートに書き込んでいるところを見て少し興味を持ち、睡眠を止めて見てみる。

そのノートには、漆黒の服に身を宿したイケメンの青年が描かれていた。

普通に見れば格好いいが、おそらく意味もわからず書いたであろう英語の羅列がアホな感じを際立たせている。

気にしないでおこう。騒いでいるクラスメイト達をほつといて小鷹が眠りにつこうとしたとき教室の引き戸がガラガラと開いた。

「ギャーギャーうるせーんだよ。発情期ですか？ コノヤロー」

突然の教師、坂田銀時の登場に生徒達はとりあえず静かになる。

それにしてもだ。小鷹は思う。このやる気の微塵も感じられない人が何で教師なんてやってるんだ？

この男坂田銀時は見た目からして教師の常識から逸脱している。

授業中だろうが構わず加え煙草、教育者とは思えない死んだ魚のような目、銀髪天然パーマ。

「おいこら。天然パーマは関係ねーだろ。リメイクしなきゃいけねー事態にしたくせによ」

「いや、作者をイジめないでください」

いきなり天井に向かって話す銀時に小鷹はツツコム。

「ちつ、わーつたよ。じゃ、日直、号令たのまー」

言われて小鷹は気づく。そういえば俺が日直だった。

「起りーて『あ、ちよつと待て羽瀬川』」

小鷹が、号令をかけようとした時、銀時が待ったをかける。

「今日から、「起りーつ」「礼」「クロス！」にする」

完璧に思いつき100%の提案に小鷹は黙って従うことにする。このまま反論しても意味がない。そう考えたからだ。

しかし小鷹が号令をかけようとしたところに疑念の声を上げた者がいた。

他の生徒達とは違い執事服に身を宿した近衛スバルだ。

「先生！ 着席からクロスにする意図がわかりません」

「意図だあ？ 意図なら生徒手帳の隠しページに書いてあるから読んどけ」

そこで今度は明久が手を上げる。

「先生！ 僕、生徒手帳をチリ紙交換に出してしまいました！」

「あんな小さな手帳でトイレットパーパー何センチ貰えたんだよ。つーかお前を出すぞチリ紙交換に」

頃合いだな。そう思い今度こそ小鷹は口を開く。

「起りーつ、礼、クロス！」

全員が立たたそして席につく。

それを見ていた銀時は、こともなげに言った。

「うん。面白くねーな。やっぱ元に戻そう」

もう戻すんかい！ でも小鷹はツツコまなかった。絶対面倒くさいことになるからだ。

「じゃあ、今日のHRの議題に入る」

銀時は黒板に体を向けチョークで字を書いていく。

そこには〈休み明けテスト〉と書かれていた。

銀時は再び生徒達に体を向けて言う。

「が、ある。来週からな。お前ら一科目でもいいから80点以上とれよ。じゃねーと再来週以降俺の授業マラソンにするから」

ええーつと、クラス中がどよめいた。

「以上」

と言つて、銀時はそのまま教室を出ていこうとする。

「いや、先生！」

何の説明もなしに去ろうとする銀時に小鷹は声を上げる。

「どういふことすか！ 八十点以上？」

「そーだよ。取れなかつたらお前らランナーズハイな」

「何でだよ！ あんた国語教師だろうが！ 何で自分の授業をマラソンにするんすか!？」

「じゃあ走りながら『万葉集』でも詠んでもらおうかな」

「難度アツプしてるじゃねーか！ 無理矢理国語に繋げてんじゃねーよ！」

そこで鍵が異議を唱える。

「そうだよ、先生！ 『古今和歌集』にしてくれよ！」

「どつちでもいいわ！ つーか先生。ちゃんと事情を説明してください！」

「あー実わな。今朝校長室に呼ばれたんだけどよ……」

話はじめて言葉を切ると、

「話すのがかかったりーから次回に話まわすわ」

いや、あんた小説を何だと思ってるんだああああ  
小鷹の怒声を華麗にスルーし銀時の一言。  
!!!!

「次回に続く！」

## 第2話 テスト前になると大掃除とかしちやう

特になんの変哲もない校長室にてクロス高校校長ハタは不機嫌そうな顔でデスクの前に座っていた。

この校長、血色の悪い紫色の顔に額の上から触覚を生やしていると完全に人間の要素ゼロであるが、そこは気にしないでの一点張りである。

ちなみに校長の傍らに立つ教頭も同じく額から触覚を生やした人外教師だ。

そんな二人に呼び出され死んだ魚の目の教師、坂田銀時は校長室へと赴いていた。

「ま、単刀直入に言うのだね、坂田先生。この間の実力テストの総合点数が非常に悪かったんだよね。しかも二学年の中でクラス順位も一番下だし」

クロス高校には中間考査前に今後の生徒に対してどういった勉強方法を取るか検証する為の実力テストが存在する。

その実力テストで乙組はハタの言う通りとんでもない結果を出したのだが、その担任である銀時はソファーにふんぞり返り、テーブルに置かれていた葉巻を吸いながら、

「わーってますよ、一応担任だし」

我関せずの顔で言った。

「ていうか、それ校長の話を書く態度じゃないよね」

ハタは静かに怒ると隣にいた教頭が銀時を一喝する。

「坂田先生、真面目に聞きなさい！」

「へいへい、すみせんねーつと」

銀時は全く悪びれた様子もなくデスクに置かれた残りの葉巻全てを内ポケットにし  
まいこんだ。

「清々しい程大つぴらに盗んだな。ま、それは取り合えず置いて…… とにかく君  
らのクラスの連中は非常に点数が悪いんじゃないよ」

「そうは言いますけど全員が全員、そういうわけじゃねーつすよ」

銀時の言う事は事実だ。

乙組はバカの集まりだが一部の、本当に一部の生徒の成績は学年トップクラスに入  
る。

しかしそんな事は校長も理解している。

「確かにそうじゃが、問題なのは総合点数なんじゃよ。ほら、言いたくはないけど君のク  
ラスの生徒にはサボリ魔の十六夜君とかバカの代名詞とか呼ばれてる吉井君とかいる  
じゃろ。他にも問題児がいつもバカ騒ぎ起こしとるし。ぶつちやけ足引つ張つちやん  
てんだよね」

「そういやハルヒとかは頭いいくせにテストの日サボって宇宙人探しに行きやがったからな…… あれも原因か。」

校長に言われ銀時はかつて自身の生徒が起こした問題を思い出した。

「ヤレヤレと言った感じに肩を落とし話を続ける。」

「で、俺にどうしろっていうんですか、ダークフレイムマスター」

「いや、校長ね。一文字もあつてないから」

「とにかくこれ以上学力が落ちるのは大問題じゃ。だからここは強硬な手を取らせてもらおうかと思っておる」

「強硬な手って、まさか……」

銀時はゴクリと唾を飲み込み間を空けると、

「闇の焔に抱かれて死ぬんすか？」

「わーお、ファンタジック。つーかさつきから無理矢理クロスネタ持ち込まないでくれない」

校長は話が續かない事にイライラし、デスクをダンツと叩き、説明を始めた。

「次の休み明けテスト、前期中間考査でクラス全員が一科目でいいから八十点以上とること。それが出来ない場合は…… 毎日残って補習！」

そして校長はア〜ンドと言って、



「坂田先生、！ 君の給料二十パーセントカットだ！」

「二十パーセントカットだとおおお!!」

銀時は目を見開き校長の触覚を掴むと怒りに身を任せ引きちぎった。

「いててて！ 何故ちぎる！ これ二十パーセントじゃないじゃん！ 百パーセントカットされてんじゃん！」

校長は額から鮮血を長しながら喚くが銀時は聞かない。

「冗談じゃないすつよ。なんで俺があのかのバカ共の為に給料カットさせられるんすか」

「そう言われても仕方ないことじゃ。このままでは乙組は学園の汚点となってしまう。それに決まった事！ 君に拒否権はないぞ！」

銀時は認めたくはなかったが、一応上司の命令ということで覚悟を決めた。

「わかりましたよ、失敗したら毎日どこるか土日来て捕集させて俺の給料も十パーセントカットしてやんよ！」

「いや、さりげに自分のペナルティー減らしてんじゃん」

★

「ま、つーわけだ。以上」

と言つてそそくさと教室を出ようとする銀時。

そこに小鷹のツツコミが炸裂する。

「待つてくください、なんすか今の回想は！　いくらなんでもいきなりすぎるでしょう！」  
「んなこと言つたつて校長の考えなんだから仕方がねーだろうが。あきらめよー、大鷹君」

「小鷹だよ！　自分の生徒の名前をちゃんと覚えろ！　ていうかー」

小鷹は教壇に立つ銀時の隣で折りたたみチェアに座る小さな女性に顔を向ける。

「道楽先生もこんなの納得できるんですか！　さつきから関係ないみたいな顔してますけど」

怒り気味の声の小鷹から問いを受けるのは道楽宴。

この乙組の副担任である、のだが彼女はあまりに背が小さくビールを買いにいつても実年齢29歳なのに未成年だよな？　と止められてしまう程のミニマムな女性なのだ。

宴はサイドテールにした自身の赤い毛先を触りながら小鷹の目も見ず、

「別に関係ないなんて思つてねーよ、あたしも給料カットされちまうし」

「じゃあ、何とか校長に言つてくくださいよー！」

小鷹が反論すると宴は不機嫌そうな顔で睨む。

「うるせーな、んなこと言われたつてあたしにどうする事もできねーんだよ。お前からで何とかしらや、カモメ君」

「いや、あんたも名前覚えろよ！ もう鳥の種類変わっちゃってるし！」

小鷹のツツコミを筆頭に他の生徒達からも非難の声が次々に上がる。

ふざけんよ！ そうだそうだ！ 話にならない！ 我が邪王心眼でも出来ない事はある 意味わかんないわよ！

「大体先生、あんた自分だけペナルティー下げてんじやないすか！ ずるいつすよ！」  
鍵が言うのと、八幡も続く。

「確かに。先生、あんたが余計な事言つたせいで俺達が土日まで補習されるなんてのは納得がいきませんが」

「その通りだ！ 我が邪王心眼も怒りに満溢れ、今にも目覚めそうだ！ くっ……  
言ってるいる間に今も……！！ 目がああああ！！！」

突然目を抑えだす六花には誰も触れず放つとく。

彼女は別に目の病気ではありません。心の病気です。 by 明久

「さりげにモノローグしてんじやないわよ！」

ポニーテール胸なし美少女、島田美波の拳をくらい明久は吹き飛ぶ。

「その補習つてご褒美とかないんですか！ JSとかロリとか少女とか！」  
「全部ロリじゃねえか」

とんでもない発言をした変態王子こと横寺陽人に銀時は冷ややかにツツコム。

「僕、土日は稽古があるから無理です！ 板に張り付いて覗き見しなきゃ！」  
と立ち上がり言うスバル。

「それは家政婦の仕事だろうが。つーかどんな稽古？」

「放課後まで潰されたらナンパも出来ません！ 俺の将来計画台無しじゃないですか  
！」

鍵は涙目で叫ぶ。

「お前はナンパからどこまでの人生設計をしてんだよ」

最初は生徒達もボケをかましまくっていたが、胸に抱えていた不安は抑えきれず文句  
はどんどんエスカレートしていく。

ふざけるなよ！ 校長に抗議しろ！ ていうか、こんな約束反故にしろ！ この天パ  
が！ 死んだ魚の目！ ついでに合法ロリ！ リメイクおめでとう！ 作者のバカ野郎  
！

いつ果てるかわからないブーイングの嵐に宴は苛立だしそうに貧乏ゆすりをし始め  
る。

小鷹がこのままでは宴が暴走するかもと思った時、銀時が口を開いた。

「せーんだよ、テメーら」

まるで田舎のヤンキーの様に首を曲げ凄む銀時に生徒達は全員黙りこむ。

銀時は教卓に両手をつき、煙まじりの溜め息をついてから言った。

「いいかテメーら。胸に手をあてて考えろよ。特に女子な」

「「先生ぶち殺しますよ」」

と一部の女子達（貧乳気味の）が殺意まじりの抗議をする。

「とにかくだ」

銀時は顔をひきつらせながら続けた。

「こうなったのはてめーらのオツムが悪いのが原因だろうが。俺や道楽の方こそとばかりなんだよ、給料カットとかされてよー」

「で、でも、もうちよいハードル下げてもらうとか校長にかけあうことは出来ませんかね？」

小鷹は控えめに言うが銀時は、

「情けねーこと言ってるじゃねえよ」

とピシヤリと言った。

「いいか、てめーら。別に全教科八十点以上とんなくていいんだよ、一科目でいいんだ。ここは全員で八十点以上とって校長の鼻を明かしたらどうだ？」

ニヤリと笑いながら言う銀時の言葉に生徒達は熱い闘志を燃やし始め、決心のこもった声が飛び交う。

おお、やってやろうじゃねえか！ 校長め、見てろ！ 今こそ我が力解放する時！  
八十点なんてあれだ、えーと、その…… ちよちよいのちよいだ！

「その意気だ、野郎共！ 成功したらそれを理由に俺の給料アップだ！」

「いや、結局自分のためかい！」

小鷹のツツコミが響いた。

★

「うゝむ、これはまずい！ 非常にまずい！」

デスクに置かれたノートパソコン、その画面に映し出された乙組の様子を眺めながら校長は言った。

「あ？ なにか？」

と返す教頭はソファーに座り電撃魔王の雑誌を読んでいた。

「おいこら、わし、お前の上司だぞ。つーか漫画読んでないでこつちこい」

教頭は渋々雑誌を閉じるとデスクの前に立ちパソコンを除きこむ。

「監視カメラの映像ですか？」

「そうじゃ、乙組の教室に、なんかこう上手い具合に仕掛けたやつじゃ」

「アバウトだな、説明が」

「いいんじゃないよ、映れば。それよりもまずいぞ。生徒達が一致団結しおった！」  
「そののなにかいけないんですか？」

教頭の疑問は最もだ。

校長は不機嫌そうに答える。

「このままじゃ、わしの計画台無しだろうが」

校長の計画。

それは銀時の人気を落とすしやえ、イエーイ！といったものだ。

白髪で天然パーマ、死んだ魚の様な目とおよそ人気要素ゼロの銀時。

しかし彼は何故だか生徒達はおろか同僚である教師達からも大分人気が高く、そこそこの支持を得ている。

銀時がボケれば生徒がツツコミ、逆に生徒がボケれば銀時がツツコムんだり、その呼吸を見る限り、乙組ってまあまあ結束力高くな？　と言う感じなのだ。

しかもごく一部の女子の間では「銀時ってワルっぽいところがイカすよね」とか「銀時先生とだったら結婚してもいいかも」などとラブコール炸裂の発言がなされているのだ（校長調べ）

これらの事から校長は滅茶苦茶銀時の事が気にいらなかった。

だから痛い目あわしてやる。ついでに銀時に怨みの矛先が向くだろうから株価を下

げてやる。

と校長は今回の計画を考えたのだ。

「なのに、なんか結束し始めおつて……」

ここは様子を見て必ず陥れてやる。

青春つて感じやんみたいいな事には絶対させんからなと校長は完全に悪者顔で呟いた。



### 第3話 カンニングの準備する暇あったら勉強しろ!

2年Z組の教室では六時間目のHRを使いテスト緊急対策会議が開かれていた。

「よし、お前らなんか案だ出せよー」

教卓の上で肘をつきだるそうに言う銀時の無茶ぶりに生徒達は文句一つ言わず次々に案を出す。

「我が邪王心眼の力を今こそ解放するのだ!」

勿論マトモな案などは出ない。今のは六花だ。

「そんな力あったとしてどう役にたつんだよ」

六花は返す言葉もなく黙りこむ。

すると六花以上にアホ毛の目立つ金髪ロリ巨乳娘、シヨコラが立ち上がる。

「まず、試験官が男性だった場合、奏さんのスポンを脱がし気をひかせましょう!」

「シヨコラあ! この小説でくらいホモネタはやめよう!」

甘草が血相を変えて立ち上がる。

「先生! 僕はいつでも準備OKです!」

と言いなから横寺はムチと蠟燭を両手に持ちながら言った。

「いや、何の準備だよ。そういうのは風〇店にでも行つてやれ」

銀時の冷たいツツコミが放たれる。

すると今度は鍵が立ち上がる。

「先生！ 脱ぐと胸はなんか似てますよね！ 凄くムラムラします！」

「お前は眼科と精神科両方に行つてこい」

「先生！」

今度は明久だ。

「何だか凄く胸がズキズキします！」

「お前は本当に病院に行つてこい」

「先生！ 胸を大きくしたいです！」

と、小さく纏めたツインテールを揺らしながら春咲千和が立ち上がる。

「お前は形成外科にでも行つてこい、ついでに島田もー」

銀時は言い終える前に口を閉じた。

美波が両手をバギボキと鳴らし始めたからだ。

「銀時っち！ 夢は大きく持つ事が大事だと思うよ！ そう、私の胸のように！」

天使爛漫な美少女、遊王子謳歌は自身の胸を強調しながら言った。

「お前はもう少し脳みそをデカクしろ」

こうして大体のポケ合戦が続くと小鷹が慌てて立ち上がった。

「ちよ、落ち着けつよ、皆!」

「なんだよ羽瀬川、言いたい事がありそうだな」

「ありまくりですよ! なんすか、このやりとりは! なんでポケ合戦に発展してるんですか!」

「うるせーな、お前らが変な方向に突っ走るのがいけねーんだろ」

確かに、銀時の言う通りZ組生徒達は二言目にはポケを発するのだ。

話が進むはずがない。

「どうすんだ銀時。このままじゃ、本当にどうしようもねえぞ」

流石の宴もこれはまずいと眉間に眉を寄せながら言った。

「いや、一応方法ならあるぞ」

しかし自信ありげな顔で銀時はニヤリと笑いながら言った。

その表情に小鷹は期待よりも不安が募る。

銀時がこんな風に笑う時は大体ろくな事がないからだ。

しかし微かな希望にもすがりたい生徒達は率先的に聞こうとする。

「先生! 方法ってなんですか!」

横寺がムチを振り回しながら言った。

「いや、お前まだ持つてんの？ 危ないから捨ててくれない？」

一応教師として一度注意し、説明を続ける。

「要はどんな手を使つてでも八十点以上取ればいいんだ」

「あの一、先生…… それつて……？」

小鷹は恐る恐るきくと銀時は邪悪に笑い、

「決まつてんだろ…… カンニングだ」

カンニング!? カンニング! タイピング!? カンセンレットウ!?

約二名ほど間違えている奴がいたが、生徒全員が驚きの声を上げた。

銀時はさらに邪悪なオーラを膨らませる。

「おうともよ。カンニングすりゃ八十点なんざ、赤子の手をひねるようなもんだ」

「先生! 幼児虐待ですよ!」

鍵が手を上げて言う。

「ていうかお前をひねるぞ、キュツと」

「いや、でも先生、カンニングは流石に……やめた方がいいと思うんですけど……」

小鷹はZ組の良心としてやんわり抗議する。

しかし銀時は呆れたように言う。

「バカヤロー、おめーよお、テスト対策会議イコール・カンニング会議じゃねーか」  
「いや、おかしいだろ! そのイコールは!」

小鷹が抗議する中、夜空が声をかける。

「小鷹……」

「な、なんだよ夜空」

いつになく真剣な表情の夜空に小鷹は一瞬たじろく。

「小鷹…… お前も男だろう? だったらカンニングの一つもできないでどうする」

「そんな、喧嘩の一つでも、みたいな言い方されても困るっつーの!」

小鷹がツツコムと制服を改造しまくりフリフリのスカートをはいた金髪ツインテールの美少女、理子が笑いながら、

「大丈夫だよ小鷹、手のひらに『バレ』って書いて三回飲み込んだら絶対にバレないからー!」

とグーサインを向けて言った。

「いや、初耳だよ、そんなおまじない! てか、ねーよ、そんなおまじない!」

すると今度は横寺が立ち上がり、

「だったら左手に『ムラ』、右手に『ムラ』と書くんだ! そうするとあーら不思議!」

横寺は両手のひらをこちらに向け、

「ムラムラとなります！」

「当たり前だろ！ 何がしたいんだよ、お前は！」

「おい、羽瀬川あ」

突然下の方から声がすると思ったら宴が鋭い目で睨む宴が立っていた。

あまりにも小さく小鷹は直ぐには気づけなかったが、いたんですか、などと口には出さない。

ボコボコにされること間違いないからだ。

「羽瀬川、腹くくつたらどうだ？ 補習嫌だろ、お前も。あたしも給料カットされたくねーし」

宴は両目を閉じ腕を組ながら言う。

真面目な事を言っているように見えて教育者として失格な発言だ。

しかし宴の言葉に同調しクラス中から声がかかる。

小鷹！ 小鷹君！ 鷹君！ やろうよ！ 羽瀬川！ ハッセー！ そうだぜ小鷹！

鷹ちゃん！

「いやいや、おかしいだろ！ カンニングだぞ！ しかも担任が率先してやろうなんてさあ」

小鷹は言いつのつたが、クラス中の鷹君コールが鳴りやむ気配は全く見られない。

なんだよこのクラスは……

小鷹が思わず唾然としてみると、白髪美少女、椎名ましろが、勢いよく音をたてながら立ち上がった。

「小鷹!」

「し、椎名?」

「小鷹…… やろうよ、カンニング!」

「え…… うええ!」

小鷹は、ましろの発言に声を張り上げらほどに驚いた。

当然だろう。椎名ましろは純真無垢であり、悪意という言葉が全く不釣り合いな少女なのだ。

この乙組においては珍しい、そんな彼女がカンニングしようなどと言うのには流石に驚きを隠せない。

いったいどういうことだ! なんで椎名まで!

あ、そうか。椎名はこういう一つになるう的なの霧囲気に騙されてしまったんだ。あれ? でも本当にそうか? なんかわからなくなってきた!

頭を抱え混乱する小鷹に、

「いいじゃんよ、カンニングしようぜ、鷹ちゃん!」

と銀時が業を煮やし怒鳴った。

「いや、さつきもいきましたけど鷹ちんって、なんすか!」

「んなことりよも、どうすんだ?」

銀時は相変わらずカンニングを率先してくる。

どうするかと悩んでいると小鷹は仲間からも期待の眼差しを受けているのに気づいた。

な、なんだろう…… この妙にキラキラと輝かせた連中は。

戸惑う小鷹だったが、この場の空気に逆らう事が出来ず大きく溜め息をつくど、

「だー、もうー! わかりましたよ! やりますよ、カンニング!」

とついに折れてしまった。

その様子を見て満足した銀時は一度、よし! と頷くと生徒全員に顔を向ける。

「お前ら…… カンニング作戦開始だ!」

「「「「うおおおおお!!!!」」」」

決戦を向かう兵士の様な雄叫びがZ組に響く中、小鷹は涙を流していた。

「もう…… やだ!」





「つーわけで、カンニングだ。なんか案だせよ」

担任の問いかけにクラス中がウームとシンキングタイムに入った。

カンニングという行為じたいは簡単なのだが、これが中々いい案がでない。

個人で行うならば消しゴムに答えを書いたり筆箱に隠したりと手口は様々だが、今回の場合はクラス全員が良い点を取らなければならぬのだ。

ならば全員が情報を共有できる方法を探さなければならぬ。

十分ほどたつと横寺が挙手した。

「先生、こういうのはどうでしょう」

「言ってみろ」

「ローションを使うんです。ローションで黒板に答えを書いておく。で、それをテストが始まる前に拭き取っておく。すると、こう、なんか光の加減でテラテラ光って、いい感じに見えると思います」

「ほかねーか? ほか」

銀時は一瞬で目をそらした。

「もう却下ですか! 少しは検討してくれてもいいんじゃないですか!」

横寺が不服そうに黙ると、今度は理子が立ち上がる。

「ギー君! ギー君! だったら試験開始直後に試験管の体に爆弾を取り付けて答えを

「言わなければ爆発するとー」

「ほかねーか、ほか」

「銀時つち！ じゃあこれはどう？」

ど今度は謳歌だ。

「UOG特性の薬、一度飲んだら永遠に本音を言わせ続ける、シヨウジキンを試験管に飲

ませて答えをー」

「ほかねーか、ほか」

「先生！」

の勢いよく立ち上がる千和。

「全員が手話教室で手話をマスターするっていうのはどう？ それで答えを教えあえ

ばー」

「ほかねーか、ほか」

「先生！ 私、いい案がありますよ！」

「シヨコラか。なんかやけに自信満々だな、言ってみろ」

「まずですね！ チョコレートを教室の外に仕掛けておきます！ それに試験管がつか

れている間にカンニングを行うんです！」

「そうかー、チョコレートを餌にするのかー、うんうん。誰かほかない？」

銀時はやはり目をそらした。

しかしその後もマトモな意見が出る様子もない。

銀時は深く溜め息をつき、

「お前らよー、もつとマシな案はねえのか。このままじゃカンニングなんてできねーぞ」  
銀時に言われ小鷹は、ふとあることに気づいた。

カンニングの方法を考えるものいいが、何か重要な事を忘れているのではないかと。

「あの、先生。ちよつといいですか?」

「なんだよ、羽瀬川。いい案でも思いついたか?」

「いや、そうじゃなくて思ったんですけど、カンニングってテストの答えがあらかじめわかってやるじゃないですか、例えばですけど数学の公式とか英語の構文とか何処かに書いて隠してそれを見るじゃないですか。でも俺達は八十点以上取らなければいけない。ですが取るためだったらそんな二、三問解けるような答えじゃ無理なわけですよ。でもその答えを何処で手に入れるんですか? ていうか俺達はなんの教科をカンニングするんですか? それを考えないと意味がない気がするんですけど」

小鷹の長セリフに乙組の主にババロア脳ミソのメンバーはポカンと口を開ける。

「俺の言っている事わかる?」

小鷹が不安そうに周囲を見ていると銀時が口を開いた。



わかには騒ぎだし小鷹を吊るし上げにかかった。

ぶぎけんなよ、ツリ目！ 俺らの夢を壊しやがって！ うるせーよ！ てか何で俺が責められてんだ！ 黙れプリン頭！ プププププププリン頭あ!?! 誰だ！ 今言つたの誰だあ！

といった具合にもめ始めたZ組。

その様子を映像越しに見ていた校長、ハタは、黒幕顔で笑っていた。  
「ホッホッホッ、ま、こうなるとは思っていたぞ」

「もう完全に悪役じゃん、お前」  
教頭はタメ口で言った。

## 第4話 テストは学生にとっての大魔王

「ここはやっぱりですね、普通に勉強するしかないと思うんですよ」

前回、教師と生徒を交えた吊るし上げという、PTAに見られたら発狂されそうな暴行から解放された小鷹は言った。

「んなこと言つてよー、お前らに出来んのかよ？ ババロアな脳ミソのくせに」

今更ながらも教師らしかぬ発言をする銀時に対し小鷹はめげずに続けて言う。

「しんどいとは思いますが。でもやっぱり勉強しよう！ ちゃんと真面目に勉強して正々堂々八十点以上取りましょう！」

小鷹の表情には決意が込められていた。

それに賛同するかのように雪平が立ち上がった。

「さすがね、羽瀬川君。実は正々堂々やりたいと私も思っていたのよ」

そう言う雪平の両腕には上腕部から前腕部にかけて、タトウーのように数学の公式やら英語の単語などが書きまくられていた。

「いや、ヘビメタのベースリストか、お前は！ って俺のツツコミもよくわかんねーけどさー！」

小鷹は怒りのままに勢いよく机を叩いた。

「だから、カンニングのことは忘れるんだ！ 勉強しよう！ 勉強！」

「けどよ、羽瀬川」

小鷹のまあ、次くらいには常識あると思われる男子生徒、遠山金次が聞いてくる。  
「勉強するにしても、どの科目にするんだ？」

小鷹が確かにと頷くと、シヨコラが涎を滴ながら立ち上がった。

「だつたらチヨコレート工場見学がいいと思いますよ！」

「ねえよ、つーかテストでもなんでもねーし」

銀時が冷ややかにツツコム。

「美術！」

と椎名も意見をだす。

「ねえよ、少なくともうちの学校は」

「ケンカ」

と逢坂大河。

「いや、物騒だな。発想が」

「ケンカが駄目ならローションプロレスはどうでしょう？」

と横寺。

「なんでローションだよ。普通にプロレスでいいだろ。いや、よくねーけど」  
「宇宙人探しいに行きましようよ」

とハルヒ。

「お前は本当に自由な。つか駄目に決まってるだろ」

「受給金額の計算はどうじゃ？」

と秀吉。

「社労士か、できるならスゲーけど」

「お前らしい加減にしろよ！」

と鍵が怒りの形相で勢いよく立ち上がった。

「大喜利大会やつてる場合じゃないんだよ！　もっと真剣になれよ！　というわけで先生、組体操はどうですか！」

「お前を真剣で殺したいよ。つかそんな試験、日本大でもでねーよ、多分」

「英語は…… どうだ？」

流石にそろそろ頃合いだろうと思つた小鷹は切り出した。

「英語なら、たぶん勉強しやすいと思うんですよ。それに休み明けのテストの英語だと、ワークブックの応用問題から一部出題されるんです。それを丸暗記すれば二十点は固いと思いますよ」



英語かぁー、でもなー、俺日本人だしーと乙組の面々はまだブチブチ言い続ける。

その様子に小鷹は少しばかり殺意を覚えたが胸にしまっておく。

ほら、一応は常識人だからさ。

小鷹が説得に出ようとするのと驚く事に銀時が口を開いた。

「こうなりやウダウダ言っても仕方がねーだろ。科目は小鷹の勧めた通り英語にしよ  
う。んで毎日放課後まで残って勉強だ」

先生…… と小鷹は嬉しくなる。

放課後の補習回避の為に放課後残って勉強ってなんか変だけど、でも小鷹は嬉しかった。  
た。

いつもらダメダメだけど、少しは熱いハートを残してるのかも…… と銀時を見なが  
ら思う。

「休み明けのテスト、自力で勉強して、ぜってー八十点以上取るんだ。じゃねーと、俺の  
授業、ハードル走しながら俳句作ってもらうからな」

朝と変わってんだろ！ と誰かがツツコミはしたが、何だかんだでまとまりかけた乙  
組だった。



平日の放課後、青春を謳歌する他生徒達が部活やカラオケやらへ向かう中、乙組は勉強会に勤しんでいた。

ひたすらワークブックの応用問題を丸暗記するという勉強方法。

「ノ…… ノウ・ベター・ザン・トウ…… なにをするほど愚かではない…… ノウ・ベター・ザン・トウ…… なにをする愚かでは…… お、おろ、おろろろろろ!!!」

熟語を唱え続けていた明久は滝のように嘔吐する。

「がはあ! む、無理だ…… 僕にはこんなの無理だあ……」

「弱気な事を言ってるじゃねーぞ、明久! さっさと起きろー!」

真紅の髪を揺らしながら宴は自身よりも大きな竹刀を床に打ち付け怒鳴る。

「ぐはっ…… 闇の力を持つてしても駄目だといふのか……」

「意味不明な事を言つてないで起きろや、中二病娘!」

聞こえた六花の愚痴にも宴は容赦なく竹刀を叩きつける。

「えーと…… マイクはナンシーに詰め寄り電気を消してくださいと……」

「横寺あ! そんな卑猥な文章はねーだろうが!」

「A…… アップル。B……ブック。C……キャット」

「高校英語だつてんだらうが、春咲い!」

「A……アクセルワールド。B……バッカーノ! C…… これはゾンビですか?」

「有名ラノベのタイトル上げてんじゃねえぞ！ 加納！」

「うーん…… オールボワール」

「それはフランス語だろうが、理子お！」

「このユニークスキルを会得するには、このクエストを……」

「なにホロウ・フラグメントの攻略本読んでんだ、桐ヶ谷あ！ ワークブックを読め！」

「イーティ」

「E・Tの授業は中学までだろうが、エリオ！」

「アー・ユー・ハッピー？」

「永ちゃんは関係ねーんだよ、櫛枝あ！ それと、なんか腹たつ、羽瀬川あ！」

宴は怒りの一撃を小鷹の背後へと向けた。

「いたあ!? ちよつ、なにするんですか！」

「お前らが真面目にやんねーからだろうが！」

「少なくとも俺は真面目にやってますよ！」

苛ついているからか小鷹は珍しく宴に反論するも、宴のドスのきいた睨みに黙りこむ。

「おらおら！ テメーらが八十点以上とんなきやあたしまで給料カットされんだからな！ しつかり取り組みやがれ！」

竹刀を振り回しながら吠えまくる宴だが、やはり乙組の面々は、つついボケに逃げてしまう。

しかし勉強会が進むにつれてボケのバリエーションは減っていき、生徒達はらしくもなく黙々とワークブックに取り組むようになっていた。

その様な現状が続き三日後。

乙組の体調は既にレッドゾーンへの突入しかけていた。

目の下に濃いくま、げつそしとした頬、なんてのはまだマシンな方で、鍵は泡を吹き、六花は幻聴をきき、シヨコラはお菓子と唸りながら自身の髪を噛みまくり、エリオはなにかをひたすらに受信しだすといった奇行に走っていた。

横寺なんかは咯血、吐血、下血という三重苦に喘いでいた。

かろうじて健康なのは元々勉強は多少出来る数人足らずという有り様である。

「しよーがねえな」

グロッキー状態の生徒たちを見渡し銀時は言った。

「これじゃテスト本番までにぶっ倒れちまう。おい、保健委員！」

銀時の呼びかけに、男子生徒と女子生徒が二人立ち上がる。

「お呼びでしようか、先生」

答えた少女は、変にカーブした目立つアホ毛に腰にまで届く銀色のロングヘアをし

た、美少女、ニヤルラトホテプ、通称ニヤル子である。

もう一人は執事服に身を包み、このクラスに所属しているスーパー金持ち涼月家のご令嬢、涼月奏に仕える美少年、近衛スバルだ。

「お前、ちよいとこいつらに活を入れてやってくれ」

「わかりました……」

ニヤル子はうつつすらと死神の様な笑みを浮かべると教室中を見渡した。

やがてスバルが一人の生徒、横寺に目をつけ、ニヤル子と顔を見合せると頷きあう。

二人は横寺のもとへと死刑宣告を伝える看守の様な雰囲気醸し出しながら近づく。

「あなたが一番重症そうですね」

「え、ぼ、僕ですか……?」

ニヤル子の蠱惑的な声に横寺は妙な恐怖感を感じながら声を震わせて言った。

「そう。横寺君、あなたです。今から私たち二人で活を入れてあげますよ」

ニヤル子が指をパチンと鳴らすとスバルはポストンバックから長さ三十センチほどもある、巨大な針を取り出した。

「え、あの…… なんすかそれ?」

「針治療だ」

スバルは無表情で答える。

「さ、あなたが元気になるツボはどこかな？」

ニヤル子は明るい声で言うが横寺にとってはたまったものじゃない、怯えた声で否定する。

「いや、どこかなって…… 知らないらなやらないほうが……」

しかし抵抗むなしく二人がかりで机に押さえつけられ、ズボンとパンツを下ろされてしまう。

「多分ここですね」

スバルから針を受け取ったニヤル子は横寺の尻へと針を向けた。

「ちよ、や、やめて…… やめて！ 僕、変態キャラで通ってるけどマニアックなのはちよつと…… い、いや、やめて！ やめてとめてやめてとめてやめてとめてー」

横寺は学校内全体に響きわたるほどの世紀末的悲鳴を上げると昇天した。

その場にはビクンと体を震わし白目を向く横寺の骸が。

「さーさー！ 気合い入れろよ、お前ら！ じゃねーと保健委員に活入れられつぞー！」

銀時の脅迫めいたセリフに生徒たちは青ざめた顔でワークブックへと取り組み始める。

その後も残虐保健委員の援護、合法ロリの竹刀ラッシュもあつてかなんとか勉強会を戦いぬいた乙組。

彼等はずいぶんテスト本番の日を向かえた。

★

テスト当日、英語の試験。

配られた問題用紙を見て、小鷹は思った。

全然問題違うじゃねーか！

その通り小鷹が言っていた二十点分出題させると思われていたワークブックの問題は一つもなかった。

だが、予想外なのはそれだけではない。

残りの六十点を自力で得点できるように、この一週間英語の単語や長文などを覚えまくった。

しかしそんなのは役にたたねーんだよと言わんばかりに難しい問題が並んでいるのである。

知らない単語に熟語のオンパレード。長文なんかは何これ、英語？ 宇宙語じゃねーの？ みたいな問題が出されていた。

顔に気色の悪い汗を浮かっていると小鷹は左後方向からバギツという破壊音が聞こえた。

音の方を見るとそこには、へし折られたシャーペンを握りしめながら鬼の形相で睨みつける雄二がいた。

てめえ、どういふことだよ、話が違ふじゃねーかと目でつけている。

他の生徒たちも同じく非難の目を小鷹へと向ける。

小鷹は頭を抱え泣きたくなつた。

んなこと言われたつて俺もビックリだよ！ どうすんだこれ！

小鷹が一人うろたえる中、試験官として教室にいた銀時は壁にもたれながら、じつとある一点を見つめていた。

黒板の上の額、「糖分」を。

★

休み明けテストが終わり、全てのクラスにテストは返却された。

で、Z組はどうかというと、早い話がダメ。

ハルヒや夜空などは八十点以上なんとかいけたか、明久、六花といった面々がとれるはずもなく結果は惨敗。

Z組は全員、補習決定となつた。

全員が無言でいるなか、明久が立ち上がった。



「決めたよ！ 僕、英語のワークブック、ちり紙交換に出す！」

「好きだな、ちり紙交換。つーかどんだけ生活に困ってんだよ」

冷めた声で銀時は言った。

「けどよお！」

雄二が大声で言う。

「学校内のテストに出ないワークブックなんて、もはやワークブックじゃねえだろ！」

『英語好きな人はどうぞブック』だろ！」

「坂本、もういいからデカイ声出すなブック」

「ブック関係ないだろ！ なんだよ、その語尾は！」

雄二はつつこんだが、クラスのムードが湿っぽいせいか、どうも不発気味だ。

無理もないだろう。これから毎日土日も残って補習、銀時と宴は給料をカットれるのだ。

「みんな、すまん！」

意を決して小鷹は立ち上がった。

「俺のせいだ……俺が英語にしようなんて言ったから……」

小鷹の心からの謝罪に教室はより一層静になった。

やがて、宴がゆつくりと口を開いた。

「羽瀬川。顔を上げな」

慈悲深さを感じさせる優しい声だった。

「先生……」

「しようがねえよ、みんな頑張ったんだ。結果はダメでもクラスが一致団結したんだ。いいじゃねえか」

「せ、せんせい……!」

くそ! これはこれで涙が止まらない!

「ただな、羽瀬川」

宴はしばし間をとると、

「やっぱ、お前のせいだろうがあアアア!!」

突然宴が豹変し怒声を上げた。

やったれやあアアア!! という宴の声を合図に、なだれを打ったようにクラスメイ卜たちが小鷹に襲いかかってくる。

なめてんのか、てめえは! なにが情報持ってますだ! 使えねーにも程があんぞ!

このプリン野郎! チキン! ヘタレ! 原作で無駄にモテやがって! 闇へと消え去れ! これだからただの人間は! 死ねやあ!

と罵倒と共に小鷹に降り注ぐ拳、足の裏、手刀、消火器。

「今? 今なの!?! 今、クラスが一致団結してんの!?!」

暴力の爆心地から小鷹が叫んでいると、教室の引き戸が開き、

「ホーツホツホツ」

高笑いとともにハタ校長と教頭が入ってきた。

「やあああ、学級内暴力の中、失礼するよ」

校長は言いながら教壇に上がり、意外にも小鷹に暴力をふるわなかった銀時の横に立った。

「なんの用すか」

「いやいや、なんの用ということはない。ちいとばかり、負け犬クラスの顔を拝もうと思ってるな」

そほ言いぐさに生徒達が殺意を抱く。

宴がなんかは今にも拳をふるいそうだ。

「ところで諸君、知っておるじゃろうが、君達は今日の放課後から補習じゃからな。坂田先生と道楽先生も給料カット。この二点忘れてはおらんだろうね」

「その件ですがね校長。どうしても納得がいかねーことがあるんすよ」

「な、なんじゃ?」

「うちのバカども、今回のテストを英語にかけてたんすよ。でも、なんすかありや一体。」

バカテスの問題がまぎれこんでじゃねーの？　みたいに難しかったんすけど」

「いやいや、ここはクロス高校であって文月学園ではないぞ」

「んなことあ、わかってますよ。なんで今回だけ問題がごっさ難しかったか、その辺をはつきりしてもいてーんすけど」

銀時の声には、普段にはない凄み加わっていた。

いつのまにか教室の空気も張り詰めたものになっている。

「な、なんでつてそりゃあ君。そういう時もあるじやろ。テストなんて時と場合によつて……」

「時と場合だあ？　よく言うぜ。どうせあんたらの差し金だろ。大方うちの教師どもに言つてごっさ難しい問題出させたとかよお」

「そ、そんなもの、何を根拠に。だいたい君たちが英語にかけているなんてわしが知るよしもなからうに」

「知るよしもないつてか……　よく言うぜ」

銀時は静に呟くと、右の拳を握りしめた。

それを見て校長がうろたえる。

「お、おい、君……　ボ、ボボ、暴力は……」

先生ダメだ！　と小鷹が止めようすると宴がそれを手で制した。

道楽先生なんで？ と小鷹が思うと宴は黙って見てると目でつける。

「うるあああー！」

銀時の固めた拳、それは校長の鼻先でカーブを描き、黒板に打ちつけられた。

ドカンっという派手な音が鳴り響き、その衝撃によつて上に飾られていた額が落下した。

ガラスが割れ、中身の糖分と書かれた書がハラリと床にこぼれた。

「じゃ校長、この監視カメラはなんすか？」

クラス中の視線が、額が飾られていた黒板の上へと注がれる。

「あー」

と小鷹を含めた生徒全員が声をもらす。

その部分の壁には穴が空き、監視カメラのレンズが突き出ていたのだ。

「や、これはその」

と声をもつらせる校長。

そうか、これで合点がいく。小鷹は気づく。このカメラで校長は俺たちを監視していらんだ。

「カメラで撮られてたなんてもうお嫁に行けないよ！ ギー君」  
と抱きつこうとする理子のポケを銀時は無視した。

でも待てよ？ と小鷹は疑問を感じる。

カメラのレンズが隠された状態でどうやって撮影してたんだ？

小鷹が考えていると銀時が口を開く。

「きたねー真似しやがって。額の裏側と、糖って字の米の真ん中辺りに、上手い具合に穴開けてそつからいい感じにレンズ覗かせてたなんてよ」

えらく説明的だが、おかげで小鷹たちは理解した。

「校長、こんなことしてピーチーエーだか教育委員会だか、武偵だかにチクってもいいんすかね？」

「いや、武偵は関係ないよね、物騒だしさ」

校長は小さく言った後、銀時に指を突きつけた。

「や、だから、このカメラがわしが仕組んだっていう証拠はあるのかね！」

「証拠ってあんた、本当往生際悪いな」

「へん！ そんなの関係ないもんね！ 証拠ないんだから、わしの勝ちだもんね！ わし偉いからか、教育委員会もわしの方を信用するもんね！」

「てめえ……」

銀時と今度は宴も一緒に動く。

この二人今度こそ殴る。小鷹が息を飲んだ瞬間だった。

「もうおよしよ」

教室の後方から誰かが言った。

全員の視線が声の主に向けられた。

そこにはこのクロス高校高等部学園長、お登勢がいた。

年の頃は五十代、薄墨色の着物を粋に着こなした、学び舎の母である。

「学園長……」

校長はうめくように言った。

「校長、嫌がらせはここままでしときな。あんたが英語教師どもを校長室に呼びつけて、テストを難しくさせたのは全部ばれてるよ。なんせ……」

学園長は袖口から一巻のテープを取り出した。

「ここに全部録音されてるんだからね」

「うそーん！」

校長はすつとんきような声を出してのけぞった。

学園長は続けて言う。

「銀時。校長はね普段からだらしないあんたが妙にモテるのが許せなかつたのさ。だから今回みたいは手にでたんだよ」

「けつ小せえ、男だぜ」

「だつてわし、だつて」

校長はもう泣く寸前だ。

「とにかく、つまらない争いはこれで終わりだ。補習も給料カットもなしで、銀時もこの件はどこにもチクつたりしないってことでいいだろ」

銀時と宴は一度顔を見合せるた後、溜め息をつきながら言った。

「学園長が言うなら仕方ねーな」

「だな、まあ聞いているの通りだ校長。補習はなし俺の給料もアップだ」

「アップは言つてねえだろうがあー！」

学園長はピシリとツツコム学園長の声は、さすがと言いたくなるような鋭さだった。

「わ、わかった……」

校長は消え入りそうな声で言い、頷いた。

「ま、今回はあんたの負けだよ」

校長の肩に手をおき、教頭が爽やかに言った。

「いや、お前はこつちのチームじゃん！ なにその傍観者チックなふるまい！」

キレる校長となだめる教頭。

二人は言い争いながら教室を出ていった。

ひとまず一件落着して生徒たちは安堵する。



小鷹は銀時を見て思った。

先生、あんたいつも滅茶苦茶だけど、さっきはちよつと格好よかつたよ……  
小鷹は銀時が担任で本当に良かったと思えたのだった。

## 第5話 人は誰しも本当の自分を隠している

誰かが言った。綺麗なフグには毒がある。いや違う、綺麗なバラには棘がある。

実際その通りであり、数多くいる美女たちのなかにはその美貌とは相反して性格が悪い者も極一部ではあるが存在する。

それはZ組も同様である。

「おはよう、相変わらずのウジ虫色の頭に吐き気を覚えそうだわ」

朝のHRがあと数分ではじまるといふ時に自身の受け持つZ組へと赴いた銀時。

そんな銀時出に会い頭、挨拶という名の暴言を放ったのは雪平だ。

名前のイメージをそのまま体現したかのような、白みを帯びた髪は綺羅びやかな雪原を思わせる。

それに加え非常に整った顔立ち、いわゆる美少女。

そんな彼女の口から出る暴言に男たちは次々と涙を流しながら去っていくだろう。

銀時も同様、酷く心を傷つけたようで少し涙目で反論する。

「おまつー！ 朝から担任の俺に対してそれはなくね!! 俺の淡いハートは今にも崩れていきそうだよ！ つーか今も崩壊気味だぞ、こらあ！」

「ちよっとした虫ジョークよ。そんな事で傷つくなんて銀時先生も流石のミジンコの心臓ね」

「なにそれ、新しい言葉!? ノミの心臓でいいよな! わざわざミジンコに変える必要ないよな!」

「先生の髪色ってミジンコみたいな色だから、つい」

「いや、お前も似たような頭してっからね!」

二人が途方もない言い争い繰り広げていると時間ギリギリに生徒が一人教室へと入ってくる。

「お、ギー君、おっはようう!!」

「ぐがはあ!!」

入るなり弾丸のように抱きつく理子に銀時は、白眼を剥きながら倒れた。

「うわ、大変だ、ギー君が! 保健委員!」

「呼ばれて飛び出てジャジャジャヤ〜ン!!」

理子の呼びかけに応じ、突如天井からニヤル子が現れた。

ニヤル子は銀時を見つけると頭で考える前に巨大な針を鞘から取り出す。

ちなみにこの針はテスト編で使われたものです。

「先生! ニヤル子が今、助けますよ!」

「よーし、ギー君のお尻に刺しちゃえ〜！」

「いや、ちよつと待つて！ 先生死んじやうから！」

暴走気味のニャル子に小鷹が止めに入った。

「あれえ？ 小鷹いたの？」

「いやー、全く気がつきませんでしたよ！」

本気で驚いている理子とニャル子に小鷹は、半場ショックを受けつつもニャル子を説得する。

「いや、俺の事はおいといてそんなことしたら先生、死んじや……」

「戻つてこい、石川あー！」

「ぐぎやああああ!!!」

ブスツという音とともに銀時の悲鳴が鳴り響いた。

「いや、話を聞けよ！ つーか石川つて誰！」

朝から悲惨な光景に乙組はたいして驚きもせず、いつものことと大半の者は呆れている。  
る。

甘草もそれは同じでいつものことだと苦笑いをしながら雪平に何げなく話しかける。

「相変わらずだよな本当…… なあ、雪平。雪平？」

しかし雪平は甘草の話に耳をかさずただ一点を見つめている。

理子やニヤル子などといった美少女に絡まれまくり白眼を剥き泡を吹きピクピクと痙攣をしだす男、銀時を。

★

「つまりですね坂田先生、あなたのところの生徒雪平ふらのさんの暴言をどうにかしてほしいんですよ」

昼休み前の職員室、自分たちの受け持つ授業がない者は各々が独自の残した仕事をこなしている。

そんな中、ニヤル子によつて尻を負傷し下半身を包帯ぐるぐる巻きにした銀時は、不機嫌そうな顔をした男性教諭竹原から問題を指摘しされていた。

普段から気難しく生真面目な竹原は銀時の教師らしからぬ行動から校長以上によく思っていない。

そのせいか今回のように何かと文句をつけることが多い。

「いや、それはわかってますよ。でもねえ俺は生徒の意思を尊重したいんですよ、タケノコ先生」

「竹原です！ 意思を尊重したいってあなた、めんどくさいだけですよね！」

「あ、ケーシー出てきた」

「いや、聞きさいつてば！ あんた何ゲームしてんですか！」

「何言ってるんすか。ケーシー早く捕まえないと逃げちゃうじゃないすか」

「あ、それはすいません…… じゃないですよ！ なんか謝ってしまいましたよ！ そんなのゲーム閉じてスリープ状態にしておけばいいじゃないですか！」

「あー、もうわかりました、わかりましたよ」

銀時はそういうとめんどくさそうにゲームを閉じ席をたつ。

時刻は既に四時間目終わり間近となっていた。

銀時は職員室を出ていく前にゲーム機を、

「ケーシー捕まえといて」

と、サボテンのような頭をした、生徒たちから何故かキバオウと呼ばれる男性教諭に渡した。

「なんでや！」

キバオウ秘伝のツツコミが炸裂した。

★

昼休みのチャイムが鳴りZ組生徒たちはたちは、ガヤガヤと騒ぎだしながら弁当を出したり学食へと向かう。

銀時も普段は宴に無理矢理学食へと連れ込まれる。

だが今回は竹原からしつこく注意された銀時は渋々、とりあえず言つとくだけ言つきやいいか、というのりで雪平に会いに教室へと赴いた。

「おー、いたいた。あいつ一人で食ってんのか」

雪平は窓際の席で一人日光を浴びながら黙々とおかずを口へと運んでいた。

彼女の口の悪さからZ組生徒といえども近よりがたく、必然的に一人となつてしまうのだ。

銀時が近づこうとするとその前に雪平が先に気づき、じつとこちらを見据え始めた。

え、なんで？

銀時は思わず固まってしまいその場に微妙な緊張感が生まれる。

すると雪平は椅子から立ち上がり銀時へと一気に迫った。

雪平は銀時の瞳を覗きこむように見つめると、

「先生……いくら私が可愛いからといって生徒と教師の間で恋愛はいけないわ」

「いや、ちげーよ。俺はただお前に話があんの、つーかそのドヤ顔やめてんくかない？」

「話!? まさか…… やめて! 私を体育館倉庫に連れていかないで!」

「連れてかねーよ! 普通に教室でいいつーの!」

「仕方がないわね、付き合つてあげるわ、お・は・な・し、に」

「おもてなしみたいに言うんじゃねーよ。つーかふりーよ」

話ついでに教室で昼飯を食べるため雪平の空いた前席に座る。

「それで話つてなにかしら？ 天然パーマ補完計画？」

「そんな計画、碇司令が許しても俺が許さねーよ！ 話つてのはお前の言動についてだ」  
「言動？」

「ああ。今朝もそうだが、お前の口の悪さをちゃんと直さなきゃなんねえ。まあ、俺は別にそれも個性なわけだからどうでもいいんだが、周りがうるせーしよ」

「……」

雪平は相変わらず黙って話をききつづける。

「まあ、つーわけだ。別に性格良くしろとまではいわねーが、もう少し言動に気をつけろよって話だ」

「……」

「雪平？」

雪平は銀時の食べている丼型弁当に入った宇治金時まみれのご飯を指差し、

「先生も糖尿病に気をつけたほうがいいわよ。まあ、先生の場合、糖分は頭にいつてるみたいだけど。白いし」

「だからその言動に気をつけろって言うてんの！ てかお前もだよね！」



銀時は淡いハートを痛めた。

★

後日、クロス高校昼休み。

学食へと向かう銀時はとある問題にぶち当たっていた。

「だーかーら！ あんたがあーしにぶつかつたのが原因でしょうが！」

「それならもう謝つたでしょ？ あなたも少ししつこいんじゃない？」

廊下の真ん中で金髪と白髪の美少女が終わらな言い争いを繰り広げていたのだ。

金髪の美少女はT組の生徒、三浦優美子。

金髪縦ロールでギャル風の生徒だ。ケンカの相手は、白髪頭は、雪平だった。

それを見た銀時は流石に見過ごすわかにもいかずケンカの仲介に入る。

「あー、二人とも。なにがあつたか知らねーが、やめとけ」

三浦は銀時に気づくとキツと睨み付け、

「銀時先生！ この女、先生の生徒だよ？ いったいどういふしつけしてるわけえ？」

しつけ、という言葉に雪平はムツとしたのか眉をほんの少し上げる。

「いや、そう言われてもな…… とにかくどうしたんだよ」

「この女があーしにぶつかつてきたの！ そのせいであーしが買ったコーヒーが溢れて

制服にかかっちゃったし！」

見ると確かに、足元には無惨に転がったコーヒーの缶、スカートには落ちた時に溢れたであろうコーヒーの染みが残っていた。

「そのことならもう謝ったし、クリーニング代だつて払うと言つてるでしょ」

「それだけはあーしも許してやるよ！ だけどこいつ、なんて言つたと思う？」

「あー、なんて言つたんだ？」

「この女『ちよつと制服汚れたくらいで騒がしくしすぎよ。そんなのだから皆から一步引かれるのよ』とか言つてきたし！」

確かにこれは雪平に非がある、しかし雪平は負けじと反論する。

「あなただつて私の、む、む…… 胸がないくせに生意気なこと言うとか言つてきたじゃない」

雪平にとつて胸というワードは禁句だった。

恐らくそれが原因で売り言葉に買い言葉となつたのだろう。

しょうがねーなど、眩き銀時は雪平に顔を向ける。

「雪平、昨日も言動には気をつけろつて言つたらうが。今回は本当にお前が原因みたいだし」

「……でも…… 胸……」

雪平はボソボソと言うが銀時には全く聞こえない。

銀時は構わず話を続ける。

「とにかく今回はお前が悪い。ちゃんともう一回謝ってだな……『糖尿病男!』え?」

いきなり飛んできた罵倒に銀時は目を丸くし雪平を見る。

「先生の天然パーマ糖尿病死んだ魚の目、マダオ三大柱ダメやろう」

「いや、ちよつと、待って……!」

次々に雪平の口から出てくる罵倒に銀時は叱りつける暇もなく、たじろいでしまう。

三浦も目を丸くして固まっている。

「先生の……先生のバカ……」

放たれた罵倒はあまりにも小さく三浦には聞こえなかった。

しかし銀時の耳には確かに聞こえた。

雪平らしかぬ、あまりにも単純で捻りのない罵倒。

雪平はそれを最後に銀時に背を向け、走って行ってしまった。

「ゆ、雪平!」

しばらく固まっていたが銀時はすぐに我に返り雪平を追いかける。

「あ、先生!」

背後に三浦の呼ぶ声があったが銀時に構っている余裕はなかった。

振り返りもせず雪平の後を追う。

雪平が階段をかけたがるのを見たが、追ううちに見失ってしまった。

既にここは最上階の五階にまで来たが雪平の姿は見えない。

「あいつ、どこに行つたんだ？　くそ……　待てよ……　この上は……」

銀時は最上階であるはずの階に作られた屋上までと続く階段を見る。

「屋上にまで行つたか……」

銀時は行き着いた考えを呟くが屋上は一般生徒以外は立ち入り禁止だ。

やっぱそれはないかと一瞬思ったが、あの雪平に三年の知り合いがいるとは思えない。

い。

「いっちょ行つてみるか」

銀時は立ち入り禁止の看板を無視し階段を上がり屋上の扉の前に立つ。

すぐ逃げられないよう雪平に感づかれないためにゆっくりと扉を開き外を除きこむ。

するとそこには驚くべき光景があった。

屋上には確かに雪平がいた。

しかし雪平は地面に四肢をつき、がっくりとうなだれ四つん這いの状態となつてい

る。

「え……　雪平？　おい、雪平、おーい」

遠くから声をかけてみるが反応がない。

気づいていないようだ。

ゆつくりと近づいていくと何やらボソボソと呟いている。

「どうして…… どうして私ってこうなんだろ……」

「……？」

「うう、三浦さんにあんな事言っちゃって悪いのは私なのに…… 胸のこと言われたらつい…… それによりにもよって先生にまで…… あんなことを…… 他の人ならまだしも…… 銀時先生に……」

え!? なにこの人! 本当に雪平!? 違う人じゃないの! モノマネ得意なコロツケさんじゃないの!?

脳内で一人混乱しまくる銀時にいまだ気づかず雪平は続ける。

「銀時先生…… 私のこと嫌いになつたかな…… いや…… 最初から私のことなんて……」

「おーい、雪平」

流石にこれ以上聞き続けるのはいけないかもしれないと思つた銀時は雪平の肩を叩く。

するのそれに気づいた雪平は銀時へと顔を向け、

「え……せ、先生？」

「えーと、どうもー」

「う……そ……」

「ゆ、雪平？」

「う…… うああああああ!!!」

「ぐげらあ!!」

雪平が悲鳴を上げたすぐその後、顎に鈍い痛みを感じながら銀時は上空を流れる雲を見ながら意識を飛ばした。



「あり…… こ(こ)ど(ど)？」

目を覚ますと雪平がいつもと同じ冷たい眼差しで銀時の顔を除きこんでいた。

「あら、起きたの先生？」

「ゆ、雪平？ あれ…… 俺なんか壮絶な光景を見た気がしたんだが、なんだ？ 全然思

い出せねー」

「あー、私が銀時先生の後頭部をひたすらコンクリートに打ちつけたからよ」

「いや、お前何してくてんの!? 生徒からなる教師への暴力!？」

「ごめんなさい…… 前に道楽先生に教えてもらった直近の五分間の記憶を失わせるツボを試したから」

「なんでそんな事をする必要があんだよ！」

「実は吉井君と坂本君がいかかわしい行為にふけていたの。それを目撃してきまった先生の記憶をトラウマにならないように私が…… うう」

雪平は完全にまるわかりの嘘泣きをしだす。

「まじかよ…… あの二人…… いやそれよりも」

銀時は本来の目的を思い出す。

自分は雪平を追いかけていたのだ。

「雪平…… 今回の事はやつぱりお前が悪い」

「……」

「だが俺も悪かったよ。考えてみたらお前も嫌な事は言われたみたいだったしな。なのになにやら、お前の言い分聞かなくてよ」

銀時は雪平の話を聞かずにいたのがいけなかったという考えに行き着いたのだ。

いつもはだらしのない銀時も今回は素直に頭を下げた。

「…… 別に、先生の言う通り私が悪いのだし。それに……」

雪平は顔を伏せるとか細かい声で、

「私の事を心配して追いかけてくれたみたいだし……」

「あ？ なんつった？」

「…… なんでもないわ。墮落ニートまん」

「そうか、なんでもないか…… ってだからその口の悪さなんとかしろよな！」

銀時のツツコミと共に昼休み終了のチャイムが鳴った。

勿論昼飯は食べていない。



## 第6話 ゴキブリを見たら三十四どころか三百匹はいると思え

「ぎゃあああああああ!!!」

クロス高校乙組、普段から喧騒に包まれたクラスである。

しかし教室から響く叫び声から普段のポケ倒す生徒たちと様子が違うことがわかった。

教室内から響くその悲鳴に銀時は少し驚く。

「なんだあいつら? 騒ぎまくって」

教室の引き戸を開けようとするとその前に引き戸が勢いよく開かれ乙組の生徒たちと先に来ていた宴が血相を変えて飛び出してきた。

「あ、銀時先生! ヘルス、ヘルスマミー!」

くりむが涙を流しながら銀時に抱きつく。

おかげで服がグショグショになる。

「ヘルプミーな、どうしたんだよお前ら」

口をパクパクとさせるくりむの代わりに六花が答える。

「漆黒の鎧を纏いし邪悪なる甲蟲……！」

「わかんねーよ」

「ゴキブリだよ！　ゴキブリ！」

珍しく宴が体を震わしながら言った。

ゴキブリ。その名前を聞いた銀時は、はつと鼻で笑うと、

「なんだよ道楽、お前普段はあんな気つえーくせに、ゴキブリだめなの？」

「ダメに決まってるんだろ！　シエイプ！　シエイプアツプ乱！」

「ヘルプミーな」

ゴキブリごときに揃いも揃って乱れまくる生徒たちに銀時は呆れながら、

「お前らなあ、東京で生きていくって事は、ゴキブリと同じ学園に通うことと同じことだぜ。見ときな東京人の生き様を」

銀時は持っていた名簿張を武器代わりにし、教室の引き戸を開けた。

★

「危ない危ない。時間ぎりぎりだったな」

廊下を走るな！　と昔から言われてきたが遅効するよりはましとダツシユで教室へ

と向かうのは小鷹。

あと一分でHRの時間となるがもう既に教室は間近。

余裕だなどと思い歩きに変えると教室の前で銀時を含めた乙組メンバー全員が怯えたように震えている。

「先生、皆もどうしたんですか?」

小鷹が不思議そうに聞くと銀時が歯をガチガチと鳴らしながら言う。

「ゴツ…… ゴキブリ! ものそついでゴキブリ!」

「パルプ! パルプフィクション!」

「ヘルプミーな」

震えていても宴のボケにツツコム銀時。

「はあ? ゴキブリ? 何を今さら言ってるんですか。東京で生きていくって事はゴキブリと共に食卓を囲むのと同じなんですよ」

小鷹はバツクから不要となっていた多数のプリントを丸め武器にし、引き戸を開ける。

「それでゴキブリはどこですか?」

小鷹は教室内を見渡すがゴキブリらしき虫はいない。

「こ、小鷹…… 後ろ……」

「え?」

夜空にしては珍しい怯えた声に反応した小鷹は首だけを後ろに向ける。

そこにはいた。

小鷹の背中にその六脚虫でがっしりと掴み触覚をピクピクと揺らす通常ならばあり得ないサイズの黒光りした虫。

ゴキブリが。

「ぎよおえらあぶああああ!! ヘル…… ゴートウヘル!」

「ヘルプミーな」

★

テレビ局のスタジオで行われる番組ではとある第一級危険生物について語られていた。

「現在学園島を中心に東京で異常発生している巨大ゴキブリについて徹底討論していきたいと思います」

人気司会者藤さんは、内容について発表すると顔を太った男へと向ける。

「それにつきましてはクロス高校の校長であり生物学者でもあるハタ様に色々とうかがいたいと思います」

太った男はハタ校長だった。

ハタは無類の動物好きであり一介の教師でありながら生物学の資格を取っていたのだ。

藤さんからゴキブリの正体について聞かれハタは答える。

「ゴキブリには違いがないがの、あれは日本の虫ではない。外来種じゃ。元々あのゴキブリは某国の実験によって作られたものだったんじゃがとある事故で逃げ出している。問題となつとるんじゃ」

「そのゴキブリが日本に入りこんでしまったと」

「ま、そういうことじゃな。ほら、最近ゴキブリってなにかと話題じゃん。テラフォーマーとかヤングジャンプ的な」

「なるほど、つまり火星ゴキブリというわけですね」

「いや、別に火星に送り込んではいないぞ。しいていうならば怪獣ゴキブリーじゃな」

「いや、火星ゴキブリでよくね」

「なんでタメ口？ やんのかコラ、ちよつとカメラ止める」

★

「なんすか…… あれ……」

なんとかゴキブリをふりはらった銀時たちは教室前で戦闘体制をとりつつも動けずにいた。

小鷹の疑問に銀時は神妙な顔つきになり、

「こいつあ、仮説だが俺あ、恐らくコレが関係していると思う」

先程教室に入った時に手にいれた板チョコを取り出した。

「ああ！ それは私のチョコレート！」

シヨコラが目には涙を浮かべながら喚く。

チョコにかじられた跡があったからだ。

「恐らくチョコを食することによって奴らの中で何か予測できない超反応が起こり……」

あんなことに」

「嘘っ!？」

明久を始めとし生徒たちがにわかに騒ぎ始めた。

「まずいですよ、あんなものを誕生させた上、もしアレが街に逃げたら袋叩きです」

小鷹も額に汗を浮かべ恐らく今後起きるのであろう最悪の事態を想像した。

「わーつてるよ。そうなる前に俺たちで駆除するんだ」

「駆除つったってあんなものアタシたちだけで倒せんのかよ」

宴が訝しげに言った。

「やるしかねーだろ。確か教室に殺虫剤が置いてあったよな？ 効くかどうかわかんねーが、ないよりはましだ。羽瀬川とってこい」

「なんで俺?！」

いきなり無茶ぶり頼まれた小鷹は叫ぶが、銀時たちは聞かない。

それどころかバカにしたように、

「お前よおー、ヤンキーみたいな顔してんだなら殺虫剤くらいとれないでどうすんだよー。ホントお前は小鷹だな」

と銀時。

「だからテメーは大鷹じゃなくて小鷹なんだよ」

と宴。

「だからお前は友達が少ないんだよ」

と夜空。

「だからお前はプリン頭なんだよ」

と鍵。

「なんだお前ら、さつきから！ 暴言はきすきだろ！ つーか頭は関係ない！」

しかし小鷹はその後突っつかれたり蹴られたり貶されたりと攻撃を受け、渋々殺虫剤を取りに行くこととなった。

「くそ……こいつら……絶対許さん」

不満をもらしながら引き戸を開け、華麗な動きで教室へと侵入する。

即座に殺虫剤がしまわれたロッカーへと走り、取りだし速攻で構える。

が、

「ゴキブリが……いない?」

さすがにあれだけのデカイゴキブリが狭い教室内で身を隠せるとは思えない。

いったいどこにいったのだろうか。

考えていてもわからない。いつでも噴射できるよう殺虫剤のロックを解除し、とりあ

えず教室の外へと向かう。

その時だった。

小鷹は十七年間生きてきた事によって研ぎ澄まされた感覚により気づく。

天井から感じる奴の気を。

「……!」

バツと天井を見上げたその瞬間、

「ぎゃああああああ!!」

小鷹の悲鳴が響いた。





場面は変わって再びテレビ局。

藤さんは、渡された書類に目を通し、そのまま口に出して言う。

「えー、巨大ゴキブリの被害にあわれた方から次々とFAXが送られてきています」

《ペットがゴキブリに喰われちゃった!》

《ゴキブリに襲われた! 死ぬかと思った!》

《なんでや! なんてゴキブリがこんなデカイんや!》

《ゴキブリに襲われました。ムラムラします》

《私の桃マンがゴキブリに食われたのよ! 風穴あけてやるわ!》

「えー、といったように様々な所でゴキブリが多発していますが、東京に所属する武偵と警察が協力して治安維持に出ていますので皆さん慌てずにゴキブリから身を守ってください。それにしてもゴキブリは人を襲うようですが、どうですかハタさん?」

鼻血を垂らしたハタは説明を始める。

「ゴキブリは肉食じゃからの、皆さん気をつけてたもれ。あと、絶対に殺したりするなよ、マジでヤバイから」

「なぜ殺してはいけないのですか? このままでは東京が肉食ゴキブリーに壊滅させられてしまうのですよ?」

「それも説明するが…… その前に名前はゴツキブリじゃ」

「いや、ゴキブリーでいくから」

「ゴツキブリって言ってるんだろ。もっかいやつか？ あん？」

★

「」「死ね、コラあああああ!!」「」

小鷹の悲鳴をききつけ教室へと流れ込むように入ってきた銀時たちは目の前にいた巨大ゴキブリに勇気を出して全員攻撃をかけていた。

ゴキブリは乙組たちの猛攻になすすべなもなくいる。

ある程度攻撃を加えた銀時たちは息を切らしながら気づく。

「おい、銀時。そういうや羽瀬川のやつどこいった」

「確かに、いねーな。まるで煙みてーに消えちまった」

「あの…… 先生……」

加納が不安そうに銀時に言う。

「もしかして小鷹のやつ、ゴキブリに……」

食べられたんじゃない、という言葉は思わず飲み込み口には出せなかった。

しかしゴキブリに、というだけで銀時たちは加納が何を言いたかったのか理解した。

しかし信じたくはなかった。

誰もがありえねーよと自分に言い聞かせた瞬間、  
ゲボオ。

ゴキブリの口から胃液と共に小鷹が首に着けていたメنزネックレスのチョーカーが出てきた。

「「「「小鷹ああああ!!!」」」」

銀時は再び一斉に攻撃をしかける。

連続でゴキブリは腹に蹴りを入れられ苦しそうに呻くが銀時たちは容赦しない。

「「「「出せやああああ!!!」」」」

「いったい何味だったあ！ プリン味だったのか！ コラあ！」

「美味しかったか！ 孤独を生きる小鷹は美味しかったか！」

『キシヤアアアアアアア!!!』

たまらずゴキブリは奇声を上げる。

「おやおや、こいつ泣きやがったぜ」

宴は死にかけのゴキブリに強気で言った。

銀時も調子に乗って言う。

「泣いてすむならポリスと武偵はいらねーんだよ」

「いっつどうしてやりましようか兄貴？」

大河もヤンキーのうように首を曲げて言った。

銀時たちが最後のとどめをしようとした時、教室の引き戸が破壊された。見るとそこには、大量の黒い害虫ゴキブリが群がっていた。

★

みたび場面変わってテレビ局。

藤さんは視聴者に向かってゴキブリについての忠告をしていた。

「えー、繰り返しお伝えします。ゴキブリを見ても絶対に殺さないでください。仲間を呼ぶ恐れがあります。絶対に殺さないでください」

忠告をおえた藤さんはハタに質問をする。

「東京、特に学園島にばかりゴキブリが集中するのはどういった理由があるのでしょうかね？ バ…… ハタさん」

「おい！ 今バカつて言おうとしたな！ お前絶対後で殺すからな！…… いや、そんなことせんともお前たちは、余たちは全員、このままいくと死ぬな」

「……！ それはどういうことですか！」

死ぬという言葉に藤さんは血相を変えて立ち上がる。

「よくきけ、東京に奴等が集まるのには理由がある。恐らく東京に奴等の女王がいるからじゃ。奴等は全て一匹の雌から生まれた兄弟。まず女王がある一定の地区に巢食いそこで大量の子を産む。そして女王はゴキブリたちを使ってその国を滅ぼすのじゃ」

「そ、そんな……」

「女王が生きている限り奴等は制限なく増え続けるぞ。ゴキブリともから国を救いたきゃ女王を殺すんじや」

女王を倒せば助かるという微かな希望があるという事実を知った藤さんは興奮ぎみに言う。

「女王を判別する目印のようなものはないのですか！」

「無理じゃな。女王は普通のゴキブリの大きさでしかも見た目もまったく同じ……いや、待てよ。判別する方法はあったぞ」

「それはいつたい！」

「背中に五郎つて書いてある」

一瞬スタジオに流れる時間が止まった。

五郎……？

ゴキブリと関係なさそうな名前に啞然としつつも藤さんはハタに叫ぶ。

「なんですかその五郎というのは！」

「余がつけた名じや。五郎の奴、あんなに可愛がつてやったのに逃げだしおつて」

「おいてめえ……なんつった……!」

「え? 余、なんかまずいこと言つた? あつ!」

自身起こした失言に気づいても時すでに遅し、額に汗を浮かばせチラリと横目で見る。

そこにはお茶の間、ニュースの顔である優しげな藤さんとはうって変わり鬼の形相をした藤さんがいた。

その次の瞬間、テレビ画面に少々お待ちくださいのテロップが流れた。

★

「だー! こつち来んな!」

銀時たちは周りの机を固めその上に乗り籠城状態となつていた。

男たちは各々の持つ物を使ってゴキブリを追いはらうがいつこうに消える様子はない。

「先生! なんか女子たちが現実逃避を!」

雄二に言われ後ろを見ると宴を始めとした女たちが背中を丸め何やらぶつぶつと呟いている。

「うふふ、ゴキブリが一匹、ゴキブリが二匹、ゴキブリが三匹」

雪平は集点のあつてない目になっている。

「ゴツキツブリブリブリ〜」

雪平の隣で目だけ笑つてない顔で千和は歌い、さらにその隣では六花が虚ろな表情になり、

「我は邪王心眼の申し子…… 使い魔ゴキブリと共に混沌を生き抜く……」

「おいしいい!! お前らそんなことしてたらゴキブリの花畑見ちゃうよ!」

★

「背中に五郎ううう!!! 背中に五郎です! 五郎を退治すれば東京は…… 日本は救われ

ます!」

「痛い! 痛い! ギブギブ!」

ハタにスリーパーホールドをかけながら藤さんは視聴者へと必死に呼びかける。

「警察、武偵、パンピー! 誰でもいい! 五郎を退治し、日本を救ってください!」

★

「なんだこれ? 五郎?」

女たちを励ましている間に銀時は五朗と白い文字でかかれたゴキブリを見つけた。





りいったん強力殺虫剤を購入しに走っていたのだ。

小鷹の生存と強力殺虫剤という武器が来たことに銀時たちは皆、顔を明るくする。

「よっしゃー！ これで形勢逆転だ！」

「秀吉、僕の後ろにさがってて！ 女の子は守らないとね！」

「わしは男じゃ、明久！」

「お前ら、こんなときにまでボケるな！ それと先生！ なんか外偉いことになってますよー！」

「どういうことだ羽瀬川」

「この学園島、それに東京もチョコゴキブリがウジャウジャで大騒ぎですよ！ 放送で知らせようにもゴキブリに占拠されたようで情報も全てに伝わりきっていません」

「やべーな、俺らのせいだってバレたらぶっ殺されっぞ」

「あ、あとなんか変な噂も流れてますよ！ なんかこいつらが日本を破滅に追い込む危険生物だとか、人喰いゴキブリだとか！ 背中に五郎って書かれたゴキブリを殺せば助かるとか！ もう勝手に話が大きくなってますよ！」

その時、銀時は手を止め制止した。

自然と震える唇でなんとか声を発する。

「……小鷹君。もっかい言って」

「いや、だから背中に五郎って書かれたゴキブリを殺せば日本はゴキブリの魔の手から助かるらしいんですよ！　もう笑つちやいますね！」

「ははは……　いやー笑つちやうなー。俺、日本を滅ぼした魔王になつちやつたよ。笑うしかねーよ。なー小鷹君」

「「「「え？」」」」」

銀時のぶつちやけに小鷹も戦いながら話をきいていた男たちもすつとんきような声を上げる。

そして言葉の意味を理解し喚きだす。

「ちよつ、先生！　見たんすか！　五郎みたんですか！」

小鷹は自身の血の気が引いていくのを感じながら銀時に聞いた。

「まさかさつき捨てたのつて五郎!?!」

鍵も驚き、周りの男子たちも慌てふためき始めた。

「どこだあ！　見つけるお！」

「無理無理、もうどっか行つちやたつて。それよりステーキ食いに行こうぜ。死ぬ前に食おうぜ」

「先生！　あんた何現実逃避してんの、おいしい!!」

★

クロス高校の生徒相談室に置かれたソファーに寝そべっている銀髪の美少女がいた。シスター服に身を包んだ彼女の名は高山ケイト。

15歳という年齢でありながら学校の教職員を勤める彼女はその美貌に似つかわしくない大口を開け、欠伸をし屁をこく。

「ふわぁー、よく寝た……ん？ なんだゴキブリか？」

起き上がると床に背中に五郎と書かれたゴキブリが止まっていた。

それを見たケイトはその場にあつた雑誌を手に取り、

「えい」

と躊躇なく叩きつけた。

こうして日本は救われたのであった。

「ふわぁー、もう少し寝よ」

## 第7話 自分だけ弁当忘れた時のダメージはでかい

キーンコーンカーンコーン。

クロス高校内に昼休み開始のチャイムが鳴り響く。

乙組の生徒達がそれぞれ弁当箱を広げる中、銀時は購買で購入したアンパンにかじりついていた。

いつもならば学食で宇治金時丼を食してしているのだが、何やら厨房に問題が起きたらしく今は開いていない。

「あー、最近アンパンばかりで飽きてたなー」

銀時が愚痴っていると、隣で折りたたみチェアに座る宴が牛乳を空にまで飲み干し、「だつたら他のパンを買えばいいじゃねーか。コロッケパンとかあんだろ」

「いや、このアンパンって安いんだよ。しかも先着三名で五十円だから、いつも接戦で『ぎゃああああ!!』」

突然、悲鳴が教室内に響き渡り、思わずアンパンを落としそうになる。

銀時と宴、その他の生徒たちも悲鳴を上げた主へと視線を向けると、そこには白眼を向く明久がいた。

「ど、どうしたんだ、明久」

小鷹が心配そうに言うのと明久は、震える手を抑えながら、

「べ、弁当箱が…… ない！」

「は……？ 弁当箱？」

んだよ、忘れただけかよ。驚かせやがって。寿命縮んだぞ。

いきなり悲鳴を上げたもんだから何だと心配していた生徒たちは、どうしてもよすぎる理由にしらげだす。

しかしそれを見た明久は納得がいかんと言わんばかりに机をダンツと叩き怒鳴る。

「何を言っているんだよ、皆！ 弁当だよ！ 食料だよ！ いわば僕の命だよ！ ガ

ンダムで言うところのコアファイターだよ、操縦者だよ！」

「いや、熱く語るのはいいが、伝わりづらいつてその例え」

小鷹が冷静にツッコむと明久は拳を振り上げ、

「バカ野郎！」

「ぐけふう!!」

小鷹の顔面に拳をくらわせた。

「小鷹！ 君は何もわかっていないよ！ 弁当だなんて一週間ぶりなんだよ！ それな

のにないなんて酷すぎるよ！」

「いや、ちよつ、まつ！」

涙を流しながら八つ当たりの拳を小鷹にふるい続ける明久を見てみかねた銀時は止めに入る。

「止めるこの学園一のバカ大将。弁当忘れたのはテーマの不注意だろうか」

「まあ、確かに…… そうですね……」

明久は顔を伏せる。

やつと落ち着いたか、と誰もが思った時だった。

明久は、ギラリと目を光らせた。

「んな!？」

ゴウツ！ と風を切るような音が銀時の耳をかすめた。

すると違和感を感じ見てみるとさつきまで手に握っていたアンパンが一瞬で消えていた。

後ろを振り返るとそこには、

「くく……」

口をあんこまみれに不気味に笑う明久が銀時を見据えていた。

「なっ！ 明久、お前どういいうつもりだ！」

「どういいうつもり？ そんなの決まってるじゃないですか！」

明久はくるっとターンを決めると、

「飯がないなら人のを取ればいいじゃない！」

「最低なことをマリーアントワネット風に言うんじゃねえよ！ 俺のアンパン五百円分を返しやがれ！」

「値段もってんじゃねえよ」

宴が冷静にツツコムが状況はそれどころではない。

明久はギラギラとした目で生徒たちの持つ弁当箱を獲物を狙うライオンの様な目で見る。

「落ち着け明久！」

止めに入りながらも、しっかりと弁当を口へと掻き込む雄二。

「お前、さりげに自分の弁当守りやがって！」

銀時が恨めしそうに叫ぶと、他の生徒たちもこぞって弁当を飲むように食べほしていき

「ふあいへんです！ はやくはべないとはなではんからふばったひよこれーとが！」（大変です！ 早く食べないと奏さんから奪った高級チョコが！）

「ひよこらあ！ ふあんかはいとほもつたらひよまえがほつてたのか！」（シヨコラあ！ なんかないと思つたらお前が取つてたのか！）

「ふあいへんです！ はやくはべないとはたしよふあんでもにうむが！」（大変です！ はやく食べないと私のパンデモニウムが！）

ギシャー！ と唸る妖怪の好む妖精パンデモニウムにかじりつくのはニヤル子だ。

「ひや、ほまえはなんつーもんふってんだ！」（いや、お前はなんつーもん食ってんだ！）  
 ほんなほきでほたかよふっこみははくへつひた（こんな時でも小鷹のツツコミは炸裂した）

「いや、なんで他の文まで口調モゴモゴになってんだよ！」

「さっすがギー君！ 小鷹がツツコミずらい時にツツコむとはね〜！」（はっふがひーくん！ ほたぎふっこみふらいほきにふっこむとはね〜！）

「理子！ お前にいたっては○と□の中身が反対になってんぞ！」

「お前ら〜……！」

全員でボケまくっていると、放つとかれた事に怒りを覚えたのか明久が恨めしそうに唸んでくる。

小鷹が恐る恐るなだめようとする。

「お、落ち着けて明久…… 忘れたのはお前が原因なんだしさ」

「ふん、そんなの関係ないね！ 僕の苦しみを…… 皆にわからせてくれるわああ!!!」

雄叫びを上げながら飛び上がり銀時たちへと迫った。



その直後。

「うるせ」

宴の小さな拳、アッパーカットが明久の顎へと見事に直撃した。

「ぎゃひんー！」

床へと頭から落下し、明久はうつ伏せの状態へも陥った。

流石に大丈夫かよ、と生徒たちら遠目から無事を確認する。

すると明久は目元から涙を流しながら顔を上げた。

「み、みんな〜」

「うおっ!? なにいきなり泣いてんだー！」

目の前で突如泣き出す明久に雄二がたじろくと、明久は起き上がり涙を拭いながら、

「うっうっ、ごめんよ皆。弁当がないからって、暴れちゃって。でも道楽先生に殴られて

正気に戻ったよ。本当にごめん」

「……なに言ってるんだよ」

銀時が不意に口を開いた。

明久は思わず目を見開く。

「俺たちも悪かったさ…… お前が困ってる時に弁当をわけてやらなくてよ」

「ま、確かにそうかもな」

甘草も続いて言った。

さらにシヨコラも、

「モグモグ…… ほうですほうです。吉井さんだけがわふいわけじゃありません」

「いや、言ってる側からチヨコ食うな」

小鷹的的確なツッコミが炸裂するなかでも皆それぞれ明久へと弁当を差し出す。

「特別に私のパンデモニウムをあげますよ！」

「くく…… 我が邪王心眼の力の源もわけてやろう」

「ま、しょうがないわね。アキはとんでもないバカだし」

明久は仲間たちからの慈悲が込められた弁当、もとい食べかけをもらい再度滝のように涙を流した。

「みんな、みんなありがとう！ ほとんどご飯しか、ていうかご飯粒しか残ってないけどありがとう！ ニヤル子のは本当にいらさないけどありがとう！ 六花にいたっては嫌いなトマトを貰っただけだとありがとう！」

本当に嬉しいのかどうか、何だかよく解らないが明久の号泣に仲間たちは微妙に感動していた。（パンデモニウムはゴミ箱に捨てられた）

なんかこれって青春やん！

そう皆が思った時、宴が一個の瓶を見つけた。

「おい…… これはなんだ…… 吉井」

宴の握っている瓶の中には胡麻が入っており、僕の弁当！ と書かれたラベルが貼られていた。吉井明久と名前も書かれている。

「あ、僕の今日のご馳走！ 良かった、持ってきてたのか！ いやー、いつも塩水だったから固形物は本当に久しぶりで楽しみにしてたんですよ」

あははと明久は笑っていたが銀時たちは笑っていなかった。  
それどころか黒いオーラを発している。

「てめえ吉井…… どういうこった…… つまりあれなのか？ お前が錯乱するほどの弁当が胡麻だったてのか？」

「そうです！」

銀時が震えた声できくと明久はグーサインを向けて言った。

すると銀時たちは一歩前に足を踏み込むと、

「「「ふざけんじゃねえええ!!」」」

一斉に明久へと飛びかかった。

なめてんのかこらあ！ なにが弁当忘れただ、あんなもん無いのと一緒じゃあ！ 死ねえ！ てめえは一生水飲んでろ！ お前の昼飯はパンデモニウム胡麻がけじゃあ！

「ちよつと待って！ パンデモニウムはまずいって！ そんなの食べたら大事な何かが

失われちゃうって！　かけるならせめてマヨネーズ！　マヨネーズにして……　ああ  
あああああ！！！！」

昼休みを終える鐘と共に明久の叫びが校内に響きわたった。

## 第8話 マンションにはいろんな連中がいる

「椎名いなくね？」

朝のHR、出欠の確認を取っていた銀時はタバコを加えながらすすとんきような声を上げた。

実際教室中を見渡してもどこにもいない。

椎名の席は座ってもらえる主人が来ず、哀愁を漂わせている。

「今さらですか先生。椎名なら、この前のテスト以来学校に来てないですよ」

小鷹は呆れたように言った。

すると銀時はそうだったげかなと首を傾けしばらくすると、ぽんつと手を打ち、

「ああ！ テスト編以降全く出てなかったのは、作者の技量の無さじゃなくて本当にいなかったか」

「いや、そういうメタ発言は止めてくださいよ！ あと作者の技量については触れないでください！」

思わず立ち上がって叫ぶ小鷹の後ろで八幡がよそよそしく挙手し、

「あの、俺はちゃんと登校してるのに出番少ない気が……」

と言いかげだが拳を突き上げ勢いよく立ち上がった明久に遮られた。

「だったら僕の出番も少ないと思います！」

「お前は充分出てるだろーが。特に前回とか」

朝という力のない時間帯ということもあつてか冷めたツツコミを入れると銀時は面倒くさそうにため息をついた。

「たく、じゃあねーな。椎名からはなんの連絡もねーしこりゃあ、あいつの家にも行って様子見に行くか」

珍しく教師らしいこと言うんだなと感心した小鷹だったが直ぐにそんな自分に後悔する。

「よし、じゃあ俺は椎名の家に行くからお前ら一時間目自習な……今日の新台なんだったけかな」

「つて、あんたパチンコ行く気だろ！ 椎名の家なら放課後にしろお！」

★

クロス高校の一日の授業が終了し学年主任である竹原に事情を説明した銀時は、常時パチンコに行きかける衝動を抑え椎名の住む十五階建てマンション、サンヴェール甲陽園に来ていた。

「あいつケツコー良いところ住んでんな」

マンションを仰ぎ見、銀時は呟いた。

実際は平均的な価格で住める極普通のマンションだが、貧乏生活を営んでいる銀時にとつては高級そのものだ。

まじまじと値踏みするかのように見ながら玄関へと入ろうとする。  
すると、

「見つけたわよあなた！」

とゆつたりとしたそれでいて高い声が聞こえた。

銀時はいきなり、なんだと振り替える。

そこには誰もいなかった、と思つたら下を見るといた。

キラキラ輝く目をうるうるすると涙で滲ませ両手を重ねる少女。

見たところ幼稚園児だと思われる。

「あー、お嬢ちゃん。なんか用？」

後ろに小さく纏めた髪を揺らしながら少女は意気揚々と答えた。

「夢葉ねえ、今、おままごとしてるの！ 設定は浮気という関係の纏れから生じる三角関係！」

「ガキの癖にずいぶんヘビーじゃねーか」

銀時が呆れていると突然背中に衝撃が走った。

「ゴヒャア!？」

痛みを覚えしやがみこみ背中を抑える銀時。

後ろを振り返ると真つ赤に染め上がったツインテールをした少女が拳を構え銀時を睨んでいた。

「貴様！ 痛いけな少女に手を出そうとは何事か！ 貴様の様なやからは妾が成敗してくれる！」

「何の話だよ！ こらガキ、いきなり大人を殴り飛ばすもんじゃねーぞ！」

「延珠お姉ちゃん、違うよ。その人は夢葉のダンナ様」

「ダダダダンナ様だとお!? この天然パーマめ、ロリコンか！ 妾は愛しの殿方に目もくれてもらえていないというのに！」

「違う！ ただのままごと、ガキの遊びだ！」

「そんな！ 夢葉との事は遊びだったのね」

夢葉という少女はオヨヨと声を鳴らしながら地面に座り込む。

それを見た延珠という少女は銀時に指を突きつけ、

「おのれ、諸悪の根元め！ こんな痛いけな少女をもてあそびおつて！ 絶対許さん！」

「あ、あんな所にメタモルフオーゼする美少女連中が！」



「なに!？」

「どい〜」

延珠と夢葉は銀時の言葉に酷く反応し、銀時から視線を離れた。

しかしメタモルフオーゼする美少女など勿論うそ。

銀時は一瞬のスキを突くとマンションへと入っていった。

★

少しボケた感じのある管理人のおじさんに部屋の番号をきき出した銀時は椎名の住む707号室へと向かった。

階段を使うのはあまりにも億劫なので勿論エレベーターを使う。

エレベーターに乗り込み椎名のいる七階まで上昇していく。

その間、銀時は椎名について考えていた。

何で連絡も寄越さず学校休んだ？ 別に不良って訳じゃねーし…… ん？ そ  
ういや俺、あいつの事よく知らねーんだよな…… 無口だし、普段から誰とも話せねー  
し。あ、でも結城がよく面倒見てたか。

改めて自分の生徒について何も知らないことを痛感し頭をかきながらうーんと唸っ  
ているとエレベーターの扉が開いた。

しばらく何となく立ち止まっていたが、ふうつと息をはくと足を動かした。

707号室へと向かい進むと片手に一冊の本を持ちクロス高校の女子制服を着た少女が歩いていった。

一瞬椎名かと思つたがその容姿は違つていた。

小柄で青みのかかつた髪でボブカットをさらに短くしたような少女で長い髪の椎名とは反対そのものだ。

だが少し似ている所はあつた。

表情の固さだ。

実際一人で歩いているわけだからニコニコしているのもおかしいが、少女の表情はまるで機械のように固く眼鏡の下の瞳と眉は微動だにしない。

その点においていつも無口な椎名と似ていることに姉妹か親戚かなんかと銀時は思つた。

クロス高校の生徒でもあるようだし、椎名の事も知つているかもしれない。

聞いてみようかと近づき足を止めたが、その前に少女が銀時の方を見て無機質な表情のまま先程まで動かなかつたまぶたを繰り返して何度も瞬きしていることに固まる。

「な、なんだ？ 俺は別に怪しいもんじゃねーぞ」

まさか痴漢とでも勘違いされたかと少し焦つたがどうやらそういう訳ではないらしく、少女は瞬きを止めそのまま銀時の横を通りすぎつていった。

「ん?」

その時、銀時は少女が何かを落とした事に気づいた。

ヒラリと木葉の様に宙を舞いながら地面へと滑るように一枚の葉が着地した。

どうやら本に挟んでいた葉が取れたらしい。

「おーい、落としたぞ」

葉を広い少女を呼ぶ。

既にエレベーターの前に立ち止まりボタンを押していた少女は銀時の呼び掛けに気づくと一寸狂わない動きで顔を向けた。

まるで妖怪の様な反応の仕方に少しビビるも、葉を渡しに少女に近づく。

「これ、お前のだろ?」

言いながら葉を渡した。

葉を受け取ると少女は、それをまじまじと見始める。

そうしている内にエレベーターが到着し扉が開いた。

「あーと、行かなくていいのか?」

エレベーターを指差し銀時はきくが、少女の発した答えは全く関係のないものだった。

「お礼は?」

「へ?」

澄んだ綺麗な声だったがそれ以上に機械的なものだ。

たった一言ではあるが感情など全くないような坦々とした喋り方をするとということがわかった。

だが今はそれよりも少女の言うお礼の意味がわからず銀時は、そちらの方に考えが向く。

しばらくするも少女はもう一度言った。

「お礼は何をあげればいい」

「あ、そういうこと。だったら別にいらねーよ。栞拾っただけだし」

「そう……」

少女はそれだけ呟いた。

なんだか微妙に寂しそうにも見える。

「あー、じゃあついでにききたいんだけどよお。707号室の住人の事でなんか知ってるか?」

「その住人の隣の部屋に私は住んでいる。だけど特には知らない。けど最近部屋から女性が大声で泣きながら出ていったのは知っている」

「泣きながらあ?」

まさか椎名か、と銀時は思ったが、すぐにそれはないと首を横にふる。彼女は決して大声を出すような人間ではない。

恐らくは別の人間だろう。

「まあ、行ってみりゃいいか。じゃあ教えてくれてありがとな」

銀時はお礼を言うのと707号室へと足を進めた。

その銀時の後ろ姿を少女はじつと食い入るように見つめていた。

「坂田銀時……」

まだ教えていないはずの名前を呟きながら。



「ここが椎名の部屋か……ん？ 開いてる……？」

扉の前に立つと少しだけ開いている事に銀時は気づいた。

「たく、開けっ放しにしゃがって、怪しい男でも入ったらどうする……」

ドアノブを握り扉を全開にしようとする。銀時は視線を感じた。

706号室の扉から、今まきに出かけようとしていた男性に刺すような視線で見られていたのだ。

「な、なんだよ……」

「……」

銀時は気づく。

開けっ放しになった少女が住む部屋に無断で入ろうとする男。

不審な男は自分だという事に。

「いや、怪しいもんじゃねからーな！」

「充分うやない！」（充分怪しいわ！）

男はそう叫ぶと扉をボタンと閉め、その場から逃げるように走って行った。

「う、うやない？」

男が発したのは富山の方言である。

が、そんな事知るよしもない銀時は首を傾げながら今度こそ扉を開いた。

するとそこからパンパンに膨れ上がったゴミ袋がドサドサと落ちてきた。

思わず唾然とし中を見ると、部屋へと続く廊下の道は全て袋やゴミで埋まっていた。

「おいおい、これ本当に人住んでんの？ テラフォーマーとかいんじゃねーの。ジヨ！」

とか言つて襲つてくるよ」

などと愚痴りながらリビングへと入った。

リビングも廊下同様ゴミが散乱としていた。

その中をジャングルの奥地を進むように恐る恐る銀時は歩いていく。

さつきは冗談で言ったが、これでは本当にゴキブリが出てきそうだ。

「椎名ー、いないのか!」

名前を呼ぶが返事がない。

出かけているのかと思いい諦めて帰ろうとした時だった。

グニ。

「グニ?」

足元におかしな感触を感じ、下を見る。

そこは周り以上にゴミで溢れかえり山の様になっていた。

銀時はそこに足を突っ込んでしまったのである。

しかし問題はそれよりもこの感触。

「おいおい、まさか……」

足を抜き急いでゴミをどかす。

その中にはパンツやブラまで混ぜていたが、最早構っている暇はない。

冷や汗をかきながら全てのゴミを払いのけた、そこには、

「し、椎名ああああ!?!」

目を閉じ下着姿で静かに眠る可憐な美少女、椎名ましろがいた。

## 第9話 グラサンかけてもたいしてモテない

銀時は人生最大の謎に直面していた。

部屋中に散らばるゴミを隅に寄せ即席で座る場所を確保した銀時の目の前には下着姿で正座をする椎名ましろがいた。

銀時はましろの姿を改めて確認する。

パンツと何故か逆さまにつけられたブラジャーだけに身を包み傷一つない白い肌が露となつてしまつていた。

妖精を思わせる彼女の容姿にこの格好はあまりにも過激だ。しかし普通の女性ならば赤面間違いなしの格好にあるにも関わらずましろは表情を全く変えずそれどころか睡魔にやられていのか首を上下に揺らしている。

彼女の表情の変化の少なさには雪平を思い出すが、それ以上かもしれない。

銀時は面倒くさそうに頭をかいた。

「椎名、オメーよお、なんか羽織るぐらいしろよな。お前、あれだよ。怪しい男でも入ったらどうすんの？　今回は俺みたいない英国紳士顔負けの聖人だったから良かったものよー」



「そうね」

銀時は笑いながら言ったのだがましろは相変わらず表情を変えない。

「あれ、ツツコミとかなし？ あれ、なんか恥ずかしいんですけど。なんかスゲー顔赤くなりそうだよ。これ、なにこの気持ち」

片手で顔を覆いながら銀時は嘆いくが、やはりましろは意にも介さずにいる。

普段相手にしている明久や小鷹といった生徒たちと全く違う反応に銀時は少し寂しさを覚えるが直ぐに疑問に思っていたことを口にした。

「椎名、お前よお何でそんな格好で寝てたんだ？ しかもこんなゴミだらけのキタネー部屋だよ」

「眠いから」

「うん。お前は動物か？ なんつー原始的な答え出してんの。てか結局その格好はなんなんだよ」

銀時は心底呆れながらも理由を聞いた。

するとましろは、首を前に揺らしうーんと唸りしばらく間をおくと口を再び開いた。

「着れないから」

その言葉に銀時はガクツと一気に体の力を無くしたのを感じた。

着れないとはいったいどういうことなのだろうか。

服がないのか。それともその言葉の通り服を自分一人で着用することができないと  
いうのだろうか。

だとしたら一女子高校生として大問題である。というか今までどうやって生きてき  
たのだろうかと銀時は思った。

「そーいやお前は親はどうしたんだ？ 服も着れないんじや一人暮らしなんて無理だ  
ろ」

「…… 両親は外国よ。生活は特別に雇ったお世話係の人に任せてもらってる」

「お世話係だあ？ お前そんなボンボンだったのか」

「私は応援道具じゃないわ」

「それはボンボンだろうが。ベタなボケかましてんじやねーよ」

銀時はツツコミながらも床に無造作に置かれたワイシャツを手に取りましろへと向  
けた。

無論銀時はましろに着用させる目的で差し向けたのだが当の本人は全く意味を理解  
していないのか瞬きを繰り返し首をきよとんと傾けた。

「いや、着ろつてことだよ。んなこともわかんねーか、お前は」

「一人じゃ着れないわ」

「お前本気で言ってるの？ たく、しかたねーな」

銀時は立ち上がりましろの方にいき同じく立たせる。

こんくらい出来ねーでよく生きてたなと言いなながらもましろの腕にワイシャツの袖を通していく。

普通だったら両者共に赤面すべきシーンではあるがましろは純真無垢、銀時にいたってはましろは所詮生徒と割りきり、たいして反応もしない。

はつきりいつて何の面白みもないのである。

ボタンを閉じながら銀時は一番疑問に思っていたことをきいた。

「そーいやお前なんで学校来ねーんだ？ 別に風邪引いているわけでもなさそうだし」

「賞のメ切が近かったから」

「メ切い？！」

ましろは部屋の片隅に置かれた机へと指差す。

机上を見るとサイズB4程の原稿用紙にGペン、インクといわゆる漫画を書くためのセツトが散らばっていた。

「まさかお前漫画家目指してんのか？」

銀時が言うともましろは小さくコクリと頷いた。

すると先程よりも少し小さな声をだした。

「さすがに休んだのは悪かったと思う……」

「…… あー、別にわびることねーよ。少しくらい休んだってたいして問題はねーだろ。けどな……」

銀時は少し間をおき、

「連絡くらいはしろ。あのバカ共全員心配してたからな。お前一人でもいなくなったらあいつら直ぐ騒ぐからよ」

「…… わかったわ。ごめんなさい」

ましろは素直に頭を下げた。

しかし気のせいか銀時はましろが少しだけ嬉しそうにしているように見えた。

普段ましろは他の生徒たちと会話をあまりしない。

とはいえ、ましろは同級生たちを嫌いなわけではないということだろう。

心配されたということに嬉しさを感じたのだ。

「まあ、お前は無事だつてことは確認できたし俺は帰るか『邪魔するぞ!』」

突然玄関の方からドアを蹴り飛ばしたような音と共に男の声が聞こえた。

銀時が何がおきたと確認しに行くよりも早くかずかと足音をたてながら仏頂面の

男性が入ってくる。

顎髭とサンングラスの目立つ男だった。

「おいおい、いきなりなんなんですかあんだ？ 不法侵入ってやつだよこれ」

初対面のそれもこんな怪しげな男相手にやくざのような顔で睨みをきかせる銀時。

しかしそんな銀時にましろは、

「先生も勝手に入ってきたわ」

と、きつい一言を浴びせた。

「何言ってるんだよ。あれは不幸中の幸いってやつだ」

「いや、使い方おかしいだろ！ 言葉の意味も全く違うしよ！」

さつきまでシリアスを始める気満々だった男はいきなりのボケに思わずツツコンでしまった。

「言葉っていうのは日々進化していくものなんだよ、って志村も言ってた」

「志村、そんな格好いいこと言ってるよー！ つーかただの劣化だろ、それ！ いや、それよりも！」

男はましろへと指を突きつけ声を張り上げる。

「権名ましろ！ あんたには自分の国に戻ってもらうぞ」

男の言葉にましろの表情は一瞬ではあるが強張った。

そこに銀時がわって入る。

「あんた、いきなりやってきつて戻ってもらうってのはどういうことだ？ あとオッサン、あんたは何者だ」

「オツサンいうな！ ……俺は長谷川泰三、そこのお嬢さんの親御さんに、まあ、使えてる使用人みたいなもんだ」

「その使用人がいきなりなんの用だよ」

銀時は片眉を上げてきくが長谷川は特に気にもせず説明を始める。

「約束があつたんだ」

「約束？」

「ああ、お嬢さんは自分一人じゃなにもできねえ。だから世話係の人間を最低でも三人まで特別に派遣させた。だがもしそんな世話係でも手におえなくなった時は……」

長谷川が少し溜めてから言おうとすると先に銀時が、

「しつぺ？」

「いや、ちげーよ！ そんな軽い罰なわけねーだろ！ 強制帰国だよ、帰るんだよ！」

帰る。その言葉にましろは表情を暗くした。

そんな彼女の数少ない表情の変化を銀時はわかっていた。

しかし長谷川は気づかずそのまま話を続ける。

「二昨日のことだ。三人目の世話係から連絡があつた。『もう無理です』てな。だから約束通り連れ帰る」

あ、そういうことか。と銀時は思い出す。

栞を拾ってあけだ少女が言っていた泣きながら部屋を出ていった女性とはその世話係のことだと。

「とにかくそういうわけだ。お嬢さんには悪いがな……」

長谷川はそう言うどましろの腕に手を伸ばした。

しかしその腕はましろに届くことはなかった。

「て、てめえ……」

長谷川の腕は銀時の手で力強く掴まれていた。

「いったい何のつもりだ。というかあんた誰なんだ？」

「俺は教師だよ。悪いが連れていかせるわけにはいかねーな」

「な、なにい？」

さつきまでの死んだ魚のような目から一転、鋭い目つき睨む銀時に長谷川は冷や汗を流した。

「た、たとえあんたが教師でもこれは決定事項なんだ。ダンナ様が許すわけがねえ」

「たとえそうでも俺を通さずに勝手に帰国なんて許しやしねーよ。俺はただの教師じゃねえ、こいつの担任だ。だから担任として俺はこいつの行く未来の手助けをする」

「お前……」

長谷川はしばらくの間真剣な顔にで銀時を見据えた。

ましろま何度も瞬きを繰り返しながら銀時を見つめている。  
すると銀時がニヤツと笑いながら、

「それでも帰したいっつーなら保護者呼んできな。俺がみっちり三者面談してやんよ」  
その言葉に長谷川は、ふっと小さく笑った。

「そうかい。じゃあ仕方がねーな。お嬢さん」

長谷川は視線をましろへと移した。

「なに？」

「今日のところは帰らせてもらうぜ。あんたのことを心配してくれるやつがすぐそばにいるってことがわかっただけで儲けんもんだろ。ダンナ様には適当に言っとくよ」

それだけ言うと長谷川は背を向け部屋を出ていった。

部屋には最初の時と同じく二人だけとなった。

そんな中ましろが声を出す。

「先生……」

「なんだ？」

「ありがとう」

この時、一瞬ではあるが銀時は初めてましろの盛大な笑みを見た。

邪気一つとないそんな笑みだった。



「そりやどういたしまして…… とそりやお前これからどうすんの？」

「どうするって？」

「いや、だってよお、お前を世話する奴いねーんだろ？ それでどうやって生活するんだよ」

銀時に現実を突きつけられたましろは目をつぶり、うーんと唸った。

しばらくして目を開くと

「……じゃあ準備するわ」

「え、なんの」

「引っ越しの準備よ」

「あ？ そんないきなりか。つーか引っ越したからってなんの解決にもなんねーだろ」

銀時の疑問は最もである。

だがその疑問はすぐに晴れることとなった。

「大丈夫よ。引っ越し先は先生の家だから」

「あー、そうかー、ってなんだあそりやああああ!!」

「担任としてこいつの行く未来の手助けをする…… って言っていたわよね」

「お前、結構きついね！ お前あれだよ！ 他人に同じセリフ言われるのってかなり厳しいよ！ 昔調子に乗って書いた中二ノートと同じくらいきついよ！ 自殺もんだよ

「！」

「先生、そっちのパンツ取って」

「いや、話しを聞けよおお!!」

坂田銀時、独身。

家族が増えました。

★

「……というわけでお嬢さんはまだ帰らせる必要はないと」

長谷川は携帯電話越しに雇い主へとましろのことを話していた。

電話相手は勿論ましろの父親。

「そうかわかった。じゃあいいや、長谷川君クビ」

「え、あ、うん？　つてええええええええええ!!」

突拍子もなくクビと言われ長谷川は奇声を上げた。

「ちよつ、どういうことすか！　お嬢さんを連れ帰らなかったから？」

「あー、それもだけど。やっぱ一番は……」

「い、一番は……？」

「グラサンだよね」

という言葉を最後に電話はきられた。

長谷川はしばらくフリーズし、耳にぷー、ぷーと音が流れこんでくる。  
するとすーつと息を吸い込み、

「グラサンかよおおおおお!!!」

と喉が枯れるほどに今世紀最大の声を上げたそうた。

## 第10話 桜の木の下を掘っても別に死体とかでない

『読者の皆様、あけましておめでとうございます!』

乙組一同は新年の挨拶と共に深いお辞儀をした。

「つーか新年あけてからもう6日目だぞ。挨拶遅くね?」

子供サイズの着物を着込んだ宴が最もな疑問をぶつける。

「しゃーねーだろ。作者の野郎の更新速度おせーし。今、SAOの二次創作に、別サイトでオリジナル小説まで書いてるらしいし」

頭をボリボリとかきながら袴姿の銀時が言った。

横で小鷹が呆れたようにつつこむ。

「さりげに宣伝しましたね…… 作者の更新速度が遅いのは事実だけどさ……」

「ま、それは仕方がねえな。取り敢えずさっさと本編いくために、あれ……やつぞ」  
銀時に誘導され生徒たちが周りに固まる。

そして、

『スリー・ツー・ワンピース!!!』

「今年もよろしくお願ひいたします」じゃないのかよ。と小鷹は密かに思った。

★

桜の花が枚散る中、齡10程と思える銀髪の少年は一人桜の木の枝の上へすやすやと寝息をたてながら眠っていた。

安眠を止める者はいない。

そう油断し無造作に寝ている彼の頬に固い物体が直撃した。

「いてえ!」

痛みを覚え目を見開く。

見ると腹の上になぶつかつたと思われる小さな石があつた。

誰かが投げたのだろう。

犯人を探すため下を睨むとそこには桜柄の着物を着た少女が仁王立ちをして逆に睨んでいた。

少年は少女の風貌に一瞬驚く。

少女のショートカットに切り添えられた髪は桜色で少年の姿を映すその瞳は真紅に彩られた宝石の様だった。

「ちよつと、あんたそこから降りなさいよ!」

少女は幼い顔に似合わず芯の通つた声で少年を一喝した。

しかし少年は少女から顔を反らし、

「けつ、知るかよ。俺は寝るぜ」

再び寝る姿勢をとった。

それを見た少女は頬を膨らませ大きく怒鳴った。

「そんなとこにいたら、いずれ落ちちやうよーうだ!」

その直後、少年の耳元でバキツという音が響いた。

気づき慌てて降りようとするも時既に遅し。

枝は折れ重力の法則に従い少年は地面へと落下した。

「うぎやあー!」

少年はしばらく声にならない悲鳴をあげていたが、幸い大怪我はなく尻餅ですんだ。

その様子を見て少女は心底楽しそうにクスクスと笑う。

「ほーらね。桜の木にそんな失礼なことするからだよ」

「うるせえ、笑うな!」

少年は恥ずかしそうに顔を赤らめ怒鳴った。

「悪いの君でしょ。それよりも枝折ってくれちやつてどうしてくれるの? これ

私の大事なものなんだよ」

「うっ……」

折った事は事実。さすがに悪いと思った少年は黙ってしまふ。

「ま、この世に存在する物はいつかは壊れ行くものよ。怒りはしない。その代わり私の頼み聞いてくれる?」

「頼み? なんだよ」

「それはね……」

その時、ビュウと強い風が少年に向かって吹いた。

風の勢いに思わず目を閉じ、数秒後開けると、

「あ? どこいった……」

そこにはヒラヒラと桜の花が枚散るだけ。

少女の姿など影もなかった。

この日ある者に連れていかれた島にたつ学園で少年、坂田銀時は不思議な出会いを果たしていた。



桜枚散る春。日本の四季の中でも先代の者から近代の我々まで、長い歴史の中今なお愛される季節。

そんな春も終わりを向かえようとしている今日この頃。

クロス高校では数多くある行事の一つである桜祭りを始めようとしていた。

男女生徒と教員たちが支給されたブルーシートを広げ楽し気に会話に花を咲かせている。

とはいえ、ただでさげ数が多いクロス高校の生徒たちを二学年だけとはいえ集結させるには余程広い場所でなければいけない。

訳も解らなくなり生徒同士でぶつかり合いいざこざを起こす可能性もあるからだ。

しかしその点については問題はなかった。

クロス高校の東西南北と分けられるグラウンドの一つ、北エリアにはクロス高校の二年生とその教員を全員集合させ、さらには走り回ったりと余分なスペースが出来る程に充分な広さを持っていたからだ。

そんな北エリアは昔、初代クロス高校生徒たちの提案で多数の桜の木の苗を植えられた。

その結果、現在では北エリアには日本の美の象徴の一つである多数の桜の木が立っているのだ。

桜祭とはそんな桜の木の下のもと、生徒全員で集まり教師の出したゲームを行い食事をし、親睦を深めるものなのだ。

勿論その生徒のなかには乙組もいる。



この中で最も巨大な桜の木の下にシートを広げ、銀時を始めとした乙組の面々は自由気ままに動いている。

「たくよー、折角の花見の場だつつののに、酒も飲めねーなんてしてけるぜ」

自販機で購入したイチゴ牛乳を飲みながら銀時はぶつくさと文句を垂れていた。

そんな銀時に相手が担任であろうとしつかりと注意をするものがいた。

「何を言っているんですか。ここは公共の場なんですから飲酒なんて許しませんからね」

生徒の一人、結城明日奈ゆうきあすなである。

栗色の長いストレートヘアを両側に垂らした小さな顔にしばみ色の瞳が美しく、スラリとしたモデル体型が特徴的な美少女。

そんな彼女はクロス高校において数少ない常識人でもあり、成績も常に上位とこれまた乙組には珍しい生徒だ。

美少女で常識人、そして才色兼備ととんでもない三拍子が揃った彼女にはさすがの銀時も構わない。

わーりました、わーりましたよと言いながら再びイチゴ牛乳を飲み始める。

それを見てまったくと嘆息を吐き出すアスナの胸を突然華奢で綺麗な手の平が包み込んだ。

「うひゃあ!？」

思わず小さな悲鳴を上げるアスナに背後からニヤニヤと笑う金髪ツインテールの美少女理子りこが顔を出した。

「もう、アスナンったらー、今日は桜祭りなんだからもつと楽しく軽い気持ちでいなきやダメだつてー」

そう言いながら明日奈の胸を揉みまくる理子。

明日奈も抵抗しようにも理子のテクニシヤンな手の動きに体の力が一気に抜けていってしまふ。

ふ、ふにや……と力のない声を漏らし赤面になる明日奈に段々と興奮を覚える理子だったが突如、後頭部に衝撃が伝わった。

銀時が頭に拳骨を入れたのだ。

「いった！ 何すんのギー君!」

叩かれた頭を抑えなが理子は涙目で訴える。

「バカヤロー、オメーよお、どうせ揉むんだつたらシヨコラとかもつと巨乳を越えた爆乳のような女にしゃがれ」

「いや、そういうことじゃないわよ!」

完全に的はずれなことを言う銀時に明日奈が怒声混じりのツツコミを入れた。

ただでさえクロス高校一騒がしいクラスが桜祭りという場の雰囲気に含まればそのテンションは一気に上がる。

寿司にわさびを大量に仕込まれた雄二に、エリオに飛びかかろうとした鍵などと最早相変わらずである。

そんな中に一人の訪問者が現れた。

「おーい！ みんなー！」

という声が出た方を、乙組全員で見ると桜の舞い散る中こちらに向かつて走る少年がいた。

「あ？ あれって……」

銀時が少年が誰なのかを思い出そうとした時だった。

少年が銀時たちに向かつて走る途中、別クラスの生徒がポイ捨てしたバナナの皮を踏み、そのまま地面へと向かつて顔面から転んでしまった。しかも何故かその先には丁度よく石があり額にぶつかった。

ぐおおお!!! と悲鳴を上げ立ち上がると、ふざけて誰かが投げたボウリングの球（何故あるんだと問いたい）が少年の腹に直撃、その後、転がるボウリング球を睨み腹を抑えながらも銀時たちのもとへと向かおうとする。

すると今度はとどめだと言わんばかりに鳥のフンが頭に飛来した。

ビチョツという音に冷や汗をかき、手をふれる。

その先を感じたぬるぬるとした感触に少年はシヨツクを覚えたのか完全に停止した。これまでの彼に起こった一連の出来事はまさに不幸としか言いようがなかった。

銀時たちも啞然としている。

「え、ちよ、あいつ大丈夫なのあれ。なんかコークスクリユーに続けてハートブレイク決め込まれたぐらいの衝撃を受けちやつてるよ」

「てか、先生。あいつ確か…… あ、こつち来る！」

小鷹が何か言いかけたと思つたら少年は早くも再起動したのか重い足取りで銀時の前に立った。

鳥の糞を、持参していたタオルで拭き取り、露になった少年の頭はかなり目立つものだった。

ワックスでもつけているのかツンツンとしたウニのような髪型をしている。

少年は苦笑いを浮かべ頭をかき銀時に向かつて挨拶をした。

「いやー、先生。恥ずかしながら戻って来ましたよ」

しかし銀時はそんな少年に眉をピクリとも動かさず、

「お前誰」

「つてえええええ!? 誰つて俺ですよ! まさか本当に忘れたんですか!」

自身の顔を指をさし必死に訴えかけるが、銀時は少年のことなど全くと言っていいほど覚えていない。

そのことを察した少年はがっくりと肩を落とした。

見かねた小鷹が慌てて少年の名を言う。

「当麻ですよ、先生。上条当麻<sup>かみじょうとうま</sup>、俺たちのクラスメイトじゃないですか」

「あー、七年前にジャンプ借りの磯村君」

「いや、当麻だよ！ たった今、羽瀬川に教えてもえらったばかりじゃないですか!」  
「だってーよー、生徒名簿にもお前の名前書いてないのに知るわけねーだろ。なのに急に出てきて何？ テコ入れか」

「違いますよ！ ずっと前に登校中に事故にあつて入院してたんです」

この説明により銀時はやっと思い出した。

当麻の言う通り彼は長い間入院状態にあつた。

理由は述べた通り事故なのだが先ほどの悲惨なる光景のようにこういった不幸なことが彼の身には度々起こるのだ。

そのおかげで周りからは歩く不幸、不幸の避雷針などと呼ばれ親しまれているとかい  
ないとか。

「とにかくせつかくの初登場だし、皆とも久しぶりだし改めて挨拶でも『みんな

なあああー、こつち向いてえええ！』

当麻の声は天をも突き抜けるような甲高い声によつて遮られた。

声の主は臨時で設立された野外ステージの上でマイク片手に手を振っている。

その姿を見た極一部の男子たちから歓喜の声が上がった。

「『『メメたあああんん!!』』」

本場に極極一部狂の男子から狂気とも思える程に熱烈なる視線を受ける彼女はクロ  
又高校教員の一人、藤和女々。

場の空気など意にも返さない奇行が目立つ教師であり良く言えば天真爛漫、悪く言え  
ば傍若無人。

さらに三十路をいき四十手前の女性とは思えない瑞々しく潤いをたまった肌に女子  
高校生の様な透き通つた猫なで声。

インパクトの固まりである彼女は生徒、教師たちからは『ちよつと妖怪入つてる』『大  
供（大きな子供）』と言われる始末である。

とはいえ美女ではあるがゆえ、一部の熟女好きからは熱いラブコールを受けているの  
だ。

そんな彼女の登場に当麻との再開のことなど最早完全にかき消されてしまった。  
全員が女々の方へと視線を向けてしまっている。

「不幸だ」

せつかく帰ってきたのに早速空気になってしまった当麻は背後で静かに呟いた。

「そういえば、あの人つてエリオちゃんのお母さんよね？」

明日奈に言われ小鷹たちも思い出す。

そういえばエリオは女々の一人娘だ。

過去に父親はいたらしいが既に別れてしまっているらしい。

あの女々が一人の娘をここまで育てられたのは驚きだとエリオを見ながら改めて一

同は思った。

「……？」

そんなに見てどうしたの？ と言いたげに首を傾げるエリオを余所に、彼女の母親は

声高らかに開始の宣言をした。

「皆様お待ちせのイベントゲームを始めちゃうっぞおおお!!!」

「「うおおおおおおおお!!!」」

待っていましたと言わんばかりに今度は全ての生徒と教師たちが歓喜の声を上げる

彼らの目には闘志の炎が燃えたぎっていた。

それほどまでにこれから行われるイベントゲームに彼らは期待を抱いているのだ。

なにせ毎年行われる二年生限定教師生徒混合イベントゲームは種目は違えどその優

勝賞品の豪華さは一転して変わらない。

ある時は学園島全ての食事処無料券。またある時は超大型テレビと学園行事にしては中々良いのだ。

普段のイベント商品など良いとこノートとペンぐらいしか貰えない彼らが、この二年だけに与えられたチャンスを逃すはずがなかった。

今年の優勝商品とはなんなのか。

誰もが期待に胸を膨らまし鼻息を荒くしていると女々がついに賞品の全貌を露にすることとなった。

いつの間にか女々の隣に用意されていた、二メートルはある物体が布に覆い被されていた。

女々は両手で布を掴み一気に引つ張った。

そこには、

「か、金だああああ!!!」

グランド内の誰かが叫んだ。

その者の言う通りステージ上には現金。

何重にも重ねられた札束のピラミッドがそこにはあった。

おいおい、まじかよ…… すぎえ、億万長者になれるぜ。てか学校側かこんなことし



ていいの？ 本物か？ 金金金金！

あらゆる方から疑念の声と興奮の声が漏れていく。

それをふむふむと文字どおり聞き耳をたてて聞いている女々にももの申す者がいた。

「おい、藤和」

銀時だった。

広場の真ん中に立ち女々を見据える銀時の登場にさつきまでざわめいていた者たちも全員いったん口を閉じた。

相変わらず妙に存在感の強い人だなと小鷹は感心している。

「お前、それ本当に現金なのか？ 子供銀行券とかいうオチじゃねーだろうな」

「えー、銀君は相変わらず疑り深いわね。でも安心してこのお金は正真正銘本当に使えるわ！ 優勝したら鉛筆でも買ってちょうだい！」

何故鉛筆なのかは解らないがどうやら本当らしい。

女々は嘘だけはつかないからだ。

生徒に教師たちはさらにやる気のボルテージを上げた。

「じゃあゲームの説明をするわよー！ これから貴方たちには私の欲しいものをとってきてもらうわ！ 行く先には多数の障害があるから気をつけて！ あと全部で5回は往復してもらうから。それと最初は同じものが複数存在するけど進むにつれて減って

いつて最終的には一つだけになるから。ま、つまり優勝者は一人だけってこと！」

長々な説明が終わり銀時の周りに早速人が集まった。

小鷹に雪平。さらに宴と明久、ましろ、当麻といった面々。

「なんだよ、お前ら。今の話聞いてなかったのか？　優勝者は一人なんだぞ」

「わかつてますよ。でもこれだけ人がいるんじや優勝は難しいそうだし、だったらチームを作って勝ったら仲良くわけようと思って」

小鷹の説明に銀時は素直になるほどなど言い領いた。

それを見た宴も、

「よし！　じゃあ全員で協力して金ゲットするぞ！」

『おおおおお!!』

七人の思いが一つになった。そう思われたこの時だったが小鷹以外の彼らはどす黒いオーラを放っていた。

「ふ、まだまだ青いガキ共だぜ。俺がそう簡単に協力するとしても？　うまく利用して賞金独り占めだ……！」

「ふ、先生も皆も相変わらず甘いわね……　賞金独り占めよ……！」

「ふつ、銀時も羽瀬川たちも全員簡単に協力という言葉に乗っかりやがったな。上手いこと利用して賞金ゲットだ……！」

ーふっ、僕、さっきからお腹痛いんだけどどうしたらいいのこれ……？

ーふっ、お腹、すいたわ……！

ーふっ、このイベントを利用して今まで出番なかったぶんを取り返してやる。俺をただの不幸人間だと思ふなよ……！

はつきりいつてんでバラバラの思惑を腹に抱いた彼らによる賞金をかけたゲームがついに始まるー